

リリカル・マジカル・オレ、自爆

ジャー・ジャック・ジョー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

神様の手によって転生した主人公、鉤矢裁人は2つの特典を手に入れた転生した。

しかしその特典は『超再生能力』と『魔力変換資質・自爆』だったのだ！

いわば残機無限の栽培マンとなった裁人はリリカルなのは世界でどんなストーリーを紡ぐのか!?

そんな感じにシリアスとギャグをいい感じに混ぜ合わせられたら良いな。そんな作品です。

# 目次

オレ、転生	1
オレ、出会う	6
オレ、爆発	14
オレ、友達を作る	21
オレ、オハナシ	28
オレ、弟子入り	34
オレ、日常？	42
オレ、魔法	50
オレ、約束	58
U A 1 0 0 0 突発記念 i f 短編 自爆ヒーローゼンラマン 前編	65
？	72
オレ、戦闘	81
オレ、V S 木	81

## オレ、転生

ここに一枚のカードがある。

ギネス記録を達成したカードゲーム「遊☆戯☆王」のカード「自爆スイッチ」だ。

遊戯王をやっていない方のために説明すると、このカードは自分がピッチの時にそのゲームの勝敗を強制的に引き分けにする。そんな自爆専用カードである。

そう、自爆専用。

僕の能力もこれとは少し違うが、まあ、似たような能力である。

まずはこの能力を持つことになった経緯について話そう。

☆

その日、僕は死んだ。

トラックに轢かれた訳でもなく、少女や少年を助けた訳でもない。急に意識が暗転し、気づいたら白い空間に居たのだ。

ただ白い、それだけなのにどこか荘厳さを感じさせる、どこか圧倒される。

そんな空間だった。

僕がその空間に戸惑っていると、声が聞こえた。

部屋と同じく、荘厳で、圧倒される声だ。

「お主が、転生対象の鉤矢裁人かきやさいとかのか？」

自分の名前を呼ばれて、戸惑い、呆けていた意識が覚醒し、ハッと目を見に向けた。

すると、目の前にさっきは居なかった、少なくとも僕は気づかなかった人物が居た。

禿頭で、長く、白い髭を蓄え、顔にはいくつもの皺が刻まれているものの、若々しさも感じさせる好好爺だ。

僕はいきなり目の前に現れた老人にビックリしつつ

「は、はい、僕が鉤矢裁人です。」

と答えた。するとその老人は

「突然だが、君は『魔法少女リリカルなのは』を知っているかの?」

魔法少女リリカルなのは、そこそこアニメが好きは僕はその名前だけは知っていた。知っていることはタイトル通りの魔法少女ものであること、あとは「なのは完売です!」の有明の伝説くらいだ。

「は、はい名前だけは聞いたことがあります。」

するとその老人は満足気に頷いてから、口を開いた。

「お主にはその世界、リリカルなのはの世界に転生してもらう。」

「転生、ですか?」

思わず疑問に思い、口に出してしまった。

「左様、聞いたことはないか?」

「仏教用語、でしょうか?」

「ふむ、知らぬか」

(知らない?つまり仏教用語の転生ではないってことか)

「実は、今ワシ達神のいる天界ではとあるゲームが行われているの」

「え!?神様、ですか!」

「ん?そうじゃよ?言ってなかったかの?」

「言ってませんよ!」

「そうか、まあ、それは重要ではないのじゃ。」

「結構重要なんですが...」

「まあ、そのゲームというのが転生者をゲーム、アニメの世界に送らせて、誰が一番作品として面白い人生を送れるか、というゲームなんじゃ。」

「なるほど、転生者というのは現実の世界からアニメ、ゲーム等の別世界に送られる人ってことですか。」

「左様、ああ、もとの世界ではお主は死んだことになっておるぞ。」

それを聞いて僕は怒りを顕にした。

「死んだ、だあ!」

「何を怒っておる」

「当たり前だ!勝手に自分を殺して、親、友人を悲しませた!そんな奴

を目の前にして怒らねエ奴なんているか！」

「そうじゃったの、伝え忘れておった。」

神様は納得がいったように手をポンと合わせた。

「この転生でちゃんとした終わりを迎えた者は、願いを一つだけ叶えてもらえるのじゃ。さらに、一番面白い人生を送った者にはもう一回願いを叶えてもらえるのじゃ。」

その言葉を聞き、その神様が言わんとすることが理解できた。

「つまり、リリカルなのは世界でキャラクターとしてストーリーを紡ぎ出せば、もとの世界に返してもらえる、と?」

「そういうことじゃ。」

僕はやり場のない怒りを抱えた。振り上げた拳をどこに置いてい  
いか分らない。そんな気持ちだ。

「ちっ、頑張るしかないか。」

「じゃあ、さっさとリリカルなのは世界に送ってくれよ。」

「ほほっ、やっと本来の喋り方に戻ったか。」

「うるさいな、ほら、さっさとしろよ。」

「まあまあ、そう急ぐでない」

「ああ?」

「ただの人間を送ってもストーリーは限られておる。面白いストーリーを紡いでもらうために、お主ら転生者には特典を授けることにしておるのじゃ。」

「特典?」

「ああ、能力、異能とかじゃな。」

それを聞いてさっきの怒りなど吹き飛んだ。

男の子の夢である異能を授けてもらえる。なんて素晴らしいんだ  
!

何がいいかなー、王の財宝とか、ベクトル操作とか、とにかく強力  
なやつがいいよなー。と、目を輝かしながら考えていると

「さっきとはエライ気の変わり様じゃな。ほれ、さっさとくじを引く  
がよい。」

そんな衝撃的な一言が聞こえた。

「く、じ?」

「ん?クジじやよ?ほれ、早く引くがよい。」

「え、選べないんですか?特典。」

「当たり前前じや、こっちは娯楽でやっとするんじや。それにのう、経験的にこつちの方が面白い人生を送るやつが多いんじやよ。」

「は、はあ、まあ、いいですけど。」

もちろん不満はアリアリだが、とにかく異能がもらえるのだ。文句は言っではいけない。

よく見ると、神様が箱に穴が空いたよく見るクジ箱を持っている。いやに準備がいい。

もう神様に最初感じていた荘厳で圧倒的な感じはしない。むしろこいつは俗っぽいハゲジジイだ。

「じゃあ、引きますよ。」

「うむ」

僕は意を決して穴の中に手を入れ、なんの意味も無いのだろうと分かっていても、手をかき回し、中の紙を吟味した。

「これだ!」

そういつて引いた紙に書いてあった能力を見ると

『超再生能力』

そう書いてあった。

これには僕も大喜びだ。

「やったー!!普通に強能力だー!!」

再生能力といたらマーベルコミックの大人気ヒーロー、ウルヴァリンも同じ能力だ。

そんな強能力を引いて僕はご機嫌になった。

「ほっほっほっ、喜んでもらえて何よりじや、ほれ、もう一回引くがよい。能力は1人2つもらえるぞ。」

「もう1つもらえるんですか!?!」

これだけでも強力なのにもう1つ、なんて気前のいいハゲジジ:ゲフンゲフン、おじいさまなのだ!

「じゃあ、ひっきまーすー!」

そういつてなんの考えもなしに、さつきとは違い、箱に手を入れた瞬間に紙を取った。

そこに書いてあった能力は

『魔力変換資質：自爆』

「…へ？」

「…じゃあ、リリカルなのはの世界に送るぞ！」

神様がそう言うや否や僕の足元にぽっかりと穴が空いた。

「待って！魔力変換資質って!?!自爆って何iiiiiiii!?!」

僕はこうして、自爆能力を得て転生したのだ。

☆

「まさか、お遊びで入れたものを引くとはもう…。」

「これは、ひよっとしたら、ひよっとするかもしれないのう。」

神様一人しかいなくなった白い空間、そこでは「かっかっかっ」という豪快な笑い声が響いていた。



## オレ、出会う

落下して転生したあと、初めて意識が覚醒したのはベッドの上だった。

エロい意味ではない。子供用のベビーベッドの上だ。

（いや、しかし元の高校生からスタートではなく赤ん坊からスタートか、何か複雑な気分だな。父ちゃん、母ちゃん元気かな？）

上に着いているグルグル回るオモチャを見ながら、もとの世界の家族について思い耽っていると。急にお腹が減ってきた。

（や、ヤバイ、お腹が減ってきた！だが、ここで本能に従い泣いてしまうのは元の世界では男子高校生のプライドが…。そうだ！絶対に泣いたりするもんか！）

「おぎやー！おぎやー！」

（本能には勝てなかったよ…）

そんな即落ち2コマをやっていると直ぐに誰かの足音がしてきた。おそらく母親だろう。

「はいはい！サイ君、お腹空いたのねー。直ぐにご飯用意しますからねー。」

ベッドの上に顔を出した母親は凄く美人だった。いや、マジで美人だった。

長い黒髪は今は結われているが緩やかなウェーブを描くことが分かる。さらに、たれ目で目鼻立ちはスツキリとしており、おしとやかでありつつ意思の強さを感じさせる見た目だ。さらにオレ的には口元のほくろが良し、<sup>ベネ</sup>、<sup>デイモルト</sup>、<sup>ベネ</sup>非常に良し。

はっ！まさか今から俺はこの美人な人と言ひ方によつては授乳プレイをするのか!?

気恥ずかしいような、嬉しいような。

いや、恥ずかしいという感情は捨てて、元の世界では童貞だった俺には楽しめないプレイをしよう！

「はい、あーん」

キタキタア！さあ、おっぱいタイムだー！

しかし、目の前にあったのはスプーンだった。  
ん？あれ？ママさん？おっぱいは？  
ひよつとして、オレ、もう離乳食？  
目の前を見る、やっぱり離乳食。

「あれー？サイ君、食べないのー？食べないと大きくなれないよー？」  
ははっ、オレが今言いたいのは一言、たった一言だ。

「おぎやああああ!!」（なんでもう一年くらい早くしてくれなかったんだ、神様ああ!!）

「サイくーん？どうしたのー？」

☆

おっぱいシーンなんて無かった。

結局風呂はいるときにおっぱいは見れたからオレは満足だ。

描写はしない。

どうしても生おっぱいが見たい人は1年に4回ほどNOKでおっぱい祭りが開かれるからそれを見なさい。今場所の優勝は誰かな？  
それはそれとして。

さて、現在オレは5歳だ。

名前は元の世界と同じように鉤矢裁人。

能力は『超再生能力』と『魔力変換資質：自爆』。

うん、希望を持ってみたが能力が変わることはなかったな。

いや魔力変換資質はまだいい、おそらく魔力を何らかに変換できる能力だろう。忘れかけていたがここは魔法少女の世界、奇跡も魔法もあるんだ。作品が違うが……。

だが、自爆ってなんだよ！爆発なら分かる、自爆ってなんだよ！  
普通こういうのは電気とか炎とか水とかだろう！なんで自爆なんだよ！爆破属性はモンハンで見たが自爆属性なんてのはどのゲームでも見たことがない。

僕の先輩は、FFのボム、ドラクエのばくだんいわ、あとついでに

ヤッターマンのボヤツキー。

そんな冗談はさておき、能力の確認といこう。

能力を頭に浮かべると能力の説明が頭に浮かんでくる。なんて便利仕様。

で、肝心の説明だが…

『超再生能力』

この能力の所持者は身体の再生が異様に速くなる。即死レベルの攻撃でも生きていられる。細胞が1片でも残っていればそこから再生可能。再生の際に使うエネルギーは外部から吸収する。

つまり絶対に死なない。

ウルヴァリンかと思っただらデッドプールでした。

再生の際のエネルギーだが、そこらにあるエネルギーを勝手に使うようだ。電気だったり、熱だったり、光だったり。そして、そのエネルギーが多ければ多いほど再生スピードは速まる。

ぶっちゃけチート過ぎないか？何回でもコンティニュー可能ってことだろ？

こつちには大満足、これで不慮の事故で神様からの依頼不達成なんかにならないからな。

問題はもう一方の方だ。

『魔力変換資質：自爆』

この能力の所持者の魔力が外気に触れたとき、自動的に爆発する。練習や意思の力なんでもので抑え込めない。絶対に爆発する。可哀想に。

ははっ、笑えよ、説明文にまで哀れに思われたぞ。

つまりオレは魔力で何かを撃ちだそうもんなら、即爆破。当然爆発の威力は爆発に接触していたオレに一番降りかかる。

5歳になってから身体中にみなぎる何かがあることは分かっている。おそらく魔力だろう。だが確かめるのが怖い、てか確かめたら死ぬ。いや、死にはしないが、死ぬほど痛い。痛みで精神が壊れたらその時点でゲームオーバーだ。超再生能力では精神のダメージは癒してはくれないのだ。

だから今まで一回も爆発を試したことがない。  
あれ？リリカルなのはってバトルものだったよな。

あつ…（絶望）

いや、神様は面白いストーリーって言ったし、原作に関われとも  
言ってなかった。

つまり主人公に関わってハートフル日常コメディでもいいんじゃない  
ね？

それだ！それでいこう！それ以外で痛い目見ないで済む方法がな  
い！

よし！その方向性で決まりだ！じゃあ、頭使って悩んだことだ  
し、身体動かすために公園で遊ぶか！

☆

ふー、遊んだ遊んだ！

やっぱり友達とやるサッカーは最高だな！

しかし、どうしても不思議なことがあるのだ。

この世界に來た影響か、転生の影響か、身体能力が上がっているの  
だ。

少なくともオーバーヘッドキックなんて元の世界では出来なかつ  
た。

この謎をオレの頭の中の何かに聞いてみよう。特典のことが分  
かったのだからきつと身体能力向上の原因も分かるはずだ。

《検索 一件ヒット》

『超再生能力』

この能力があることによって身体は壊れることを知らないの  
動的に普段使うと身体が壊れてしまうような領域のリミッターを外  
している。なので、身体能力が良くなったのではなく、身体の普段使  
われていない部分を使っているだけである。

なるほど、人体の不思議だな。

てか、さらつと流したがおれの頭の中の何かというのは本当にあるようだ。

しかも先生同様検索機能付き。これは頭の中の何か先生と呼ぶべきだろうか。

そんな電波なことをやっているうちに周りの友達は全員帰っていった。

時刻もすっかり夕暮れ。親を心配させたくないでオレも帰ろうとすると、1人の少女が目に入った。

その少女はブランコに乗っていた。公園にたった1つしかないブランコに。

栗色の頭髪にそれを両側で結んだ髪型。それにクリクリとした瞳に、柔らかそうなほっぺ。

とても可愛らしい顔をしていたが、いかんせんその顔には影が差している。

憂いを帯びている、とは違う。明らかに暗い、悩んでいるのではない。何かを必死で我慢している。そんな表情だ。

一目惚れ、ではないが、オレはその娘から目が離せなかった。

何故こんな時間まで居るのだろうか、何故1人で居るのだろうか。何故、そんな顔をしているのだろうか。

居ても立ってもいられず、オレはその女の子に話をかけた。

「なあ、迎えはまだなのか？」

するとその少女は暗いままの顔を上げ、答えた。

「お母さんも、お兄ちゃんもお姉ちゃんもまだ、仕事が終わってないの。」

「お父さんは？」

「事故で、入院中なの。」

するとその少女は悲しそうな顔をした。

「じゃあ、なんで帰らないんだ？家の人、怒らないのか？」

「みんな、今が大変だから、なのはが迷惑かけちゃいけないの。わたしがいい子にしてないと、お父さんの怪我が治らないの。」

「家の人に迷惑かけると悪い子なのか？」

「そうなの。」

そこまで言うのと、その少女はまた悲しい顔をして、うつむいた。

「なあ、オレと友達にならないか？」

「え？」

少女が驚いたような顔をして、こちらを見た。

困っている少女を尻目に、オレはその少女が座っているブランコに立ち乗りする。

「ちんもくはこーとーとみなします。」

そう言っつてブランコを漕ぎ出すオレは、きつと意地悪な顔をしているだろう。

「え？きやああああ!?なんで二人乗りするの!？」

「だつてーっしかないブランコにお前が乗つてたから…。」

「言っつてくれれば降りるの!！」

「まあまあ、それより、もっとスピード上げるぜ!！」

そういつて、思いつきり漕ぐ。

「きやああああ!?」

そしてブランコは水平より高くなっていく。

「もう降りしてええええ!！」

「じゃあ、離すぞー」

手を離した。水平より高い位置で。

「ふえ?。」

直ぐに少女の手を掴みつつ前方へ飛び出す。

「いやああああああ!?」

オレは少女と共に飛び立つ。

そして、少女の悲鳴をBGMに数秒空中にいた後に、着地する。

少女を抱き抱えて。

「着地、成功」

そして、少女の方へ顔を向け、イイ笑顔で

「楽しかっただろ?。」

そう言つた。

「バカあ!!」

涙目の少女に罵倒された。

「にひっ、お前、名前は？」

「高町なのはなの、意地悪な君は？」

「鉤矢裁人だ、よろしくな。」

「あまりよろしくしたくないの…。」

「なあ、なのは、オレはこれからお前にいっぱい迷惑をかける。」

「ワルイ子、なの。」

「ああ、でも、毎日がきつと楽しい。」

「そう、かな？」

「友達や家族にかけられる迷惑ってのは、嬉しいってわけじゃないけど、胸が暖かくなるんだ。」

「そう、なの？」

「そうなんだよ。」

「じゃあ、なのははワガママを言っているの？」

なのはは泣きそうな声だった。

「ああ、ワルイ子のオレが許す！オレに、家族に迷惑をかけてもいいんだ。」

「えへっ、じゃあ、わたしも少しワルイ子になるの！」

泣きそうな声であったが、その顔は自然な、明るい、可愛らしい笑顔だった。

「じゃあ、そろそろ帰ろうぜ。家、どこらへん？」

「あっちの方なの。」

「お、オレもそっちの方だ。」

「じゃあ、サイ君とわたしはご近所さんだね！」

「そうだな。」

そんな会話をしながら、オレ達は帰っていった。

☆

その後…

「ただいまー!」

「おかえり、なのは。」

「ねえ、おにーちゃん。」

「どうした?」

「だっこ、して?」

「ああ!もちろん!」

「あー、恭ちゃんずるーい!次、私ね。」

「あらあら、じゃあ美由希の次は私の番ね。」

少しワルイ子になった子は、暖かい一家団欒を手に入れた。

一方、ワルイ子は…

「また、こんな時間まで、遊んで!」ペチンっペチンっ

「ひぐうっ!ごめんなさい、しますからあ!ひい!お尻、ペンペンは、  
やめてえ!?!」

お尻を叩かれていた。



## オレ、爆発

やあ、一年前になのはとお友達になった裁人だよ。

アレからなのはとはかなり遊ぶ仲になったよ！

で、今気づいたんだけどなのはってリリカルなのはの主人公じゃね？

リリカルなのは世界になのはって名前だろ？絶対主人公じゃないか！

主人公と出会うこと自体はいいんだが、もうちよつと心の準備をしたかったぜ・・・

さて、そんな裁人少年6歳だが、今回は隣町の公園に来ている。

その目的はズバリ、能力の確認だ。

先日やったかと思うだろうが、アレは知識上の確認だ。

いくらハートフル日常コメディを目指そうが、原作はバトルもの。原作通りに進むのだろうが、ここにはオレという存在がいる。原作通りにすべてが進むとは考えにくい。例えばオレが人質となってしまうのはが負ける等いつ不測の事態に陥るか分からない。

だから、万が一、いや！億が一になってほしい事態に備えて能力の確認はするべきなのだ。

さて、オレの能力は『超再生能力』だったな。

扱いやすい能力で良かったー。

『魔力変換資質：自爆』

いや、オレにはなにも見えない。頭の中の何かさんが訴えて来てるが、オレにはなにも見えない。

『魔力変換資質：自爆』

ふははっ、そんなことをしてもオレは屈しないぞ！

『魔力変換資質：自爆』『魔力変換資質：自爆』『魔力変換資質：自爆』

『魔力変換資質：自爆』『魔力変換資質：自爆』『魔力変換資質：自爆』

『魔力変換資質：自爆』『魔力変換資質：自爆』『魔力変換資質：自爆』

『魔力変換資質：自爆』『魔力変換資質：自爆』『魔力変換資質：自爆』

『魔力変換資質：自爆』『魔力変換資質：自爆』

やめて下さい恐怖を感じます。

そうだね、オレの能力は『超再生能力』と『魔力変換資質・自爆』だね。

やんなきゃだよね、自爆。

大丈夫大丈夫、爆破する箇所を狭めれば被害は少なくて済む。

多少音をたててもいいようにわざわざ隣町に来たんだ。

オレならいける、大丈夫だって気持ちの問題だ！どうしてそこで諦

めるんだ！！絶対できるって！！今からお前は富士山だ！！！！

よし！心の中の修造さんをインプット完了だ。

もつと！熱く！！なれよー！！！！

あれ？これダメじゃね？

まあ、いいや。とにかく覚悟は完了した。

さて、始めるぞ。

「指先に、魔力を、集、中！」

すると右の人差し指の先にあったオレの中に満ちていた何かの一部が身体から出ていこうとするのを感じる。

ふははははっ！見ろよ！流石オレ！こんなにもうまく魔力を扱え・・・あつ

魔力の加減を間違え、手から魔力を放出してしまった。

瞬間、赤黒い光が目映りこみ、次に轟音が鳴った。

バグオオオオオオオオオオオン！！

オレの身体は赤黒い爆発に吹き飛ばされた。

「ガハッ・・・」

痛い。

そんな言葉すらでない。痛いなんてもんじゃなかった。言葉にならない。右手の感覚がない。感じるのは手首から来る激痛に似たナニカだ。

そして10メートルほど吹き飛んでから、身体の至るところが熱く感じた。

これが再生なんだろうが、今のオレにはそんなことを冷静に思う余裕はなかった。

痛みが起きている右手を見る。さっきの爆発で消し飛んでいたはずの右手はほぼ全て治っていた。しかし、痛みまでは治らない。なんつー再生能力だよ。

そして、痛みで意識が飛びそうになるのを我慢して、爆心地を見る。そこには小学生中学年位の子供が寝転がればちようど埋まるほどのクレーターができていた。

なんだ、この、威力。

右手だけだ、右の手のひらと手の甲だ、そこからしか魔力を放出していない。

なのにこの威力だ。

こんなの、身体全体でやったら…

どんな、威力なのだろう。どんな、痛みなのだろう。

オレは未だに激痛が走る右手を抑えながら、警察が来る前に家に帰っていった。

☆

今日の昼食はラーメンだ。

右手の痛みなど吹き飛んだ。

しかもお湯を入れるだけのインスタントではない。お店の味がご家庭で再現できるというちよつと値が張るアレだ。

アレもいいかげんな人が作ると昨今の進化したインスタントにすら負ける出来になるが、その心配は必要ない！何故ならウチのママさんは料理が超上手！パパさんは料理があり得ないほど下手だが、ママさんが作るならお店の味、いや、それ以上に仕上げてくれる！

え？今日はママさんは友達と一緒に遊びに行つた？

え？今日はパパさんが作る？

… 右手が急に痛みだした。

さて、パパさんの紹介がまだだったな。パパさんは大人の男って感じの人だ。黒髪を後ろに撫で付けるようにセットした髪型は出来る

男をイメージさせ、鋭い目付きからは強さを感じさせる。

と、出来る限り誉めてみたが。結構ヤのつくひとに見えてしまう。最初に見たとき、オレは泣いた。

赤ん坊だったからな、泣くのも仕方がないな。仕方がないな！

さて、パパさんを止めてオレがラーメンを作ろうにもこの身体では火と刃物を使わせて貰えない。手伝おうとしても子供が手伝えることなどラーメンにはない。

詰んだ、か。

今のオレの気分はさながら刑の執行を待つ死刑囚の気持ちだ。

「オーイ。裁人ー、ラーメン出来たぞー」

来たか。どんなラーメンでもどんと来いだ！今日は午後からなのはと遊ぶ約束があるんだ！倒れてられるか！

差し出された丼からは気持ち悪いムワツとした熱気と共に真っ黒なスープと太いイソギンチャクのような麺が姿を見せた。

あれ？パッケージを見る限りこのラーメンはあっさり醤油で縮れ細麺のはずだ。

決して、こんな真っ黒な色のスープとこんなぶつとい麺では無かったはずだ。

なんだ、パッケージが間違っていたのか、きつとこれは富山の名物ラーメン、富山ブラックなんだ！。きつとそうに違いはない！

じゃあ、一気にすすって食べてるのはと遊びに行こう！

そうしてラーメンを一気にすすると

ブニツ、べちやつ、ごりつ、

などラーメンではあり得ない食感を口のなかに残しつつ、オレの意識は薄れていった。

「どうした？裁人、もうおねむか？」

オレは薄れゆく意識のなか、せめてもの抗議として軽く、本当に軽く中指を突き立てた。

☆

目が覚めた時、なのはどの約束の時間ギリギリだった。

「やっべー！」

直ぐに身体を起こして玄関から外へと向かう。

「行つてきまーすー！」

「おう、夕飯までには帰つてこいよー！」

まさか、今日の夕飯もパパさんじゃないよな？

そんな一抹の不安を残しつつなのは元へと猛ダツシユした。

☆

公園に着いた頃、なのは一人でブランコに乗っていた。

公園の時計を見ると既に約束の時間を過ぎていた。

しかし、ここで遅刻を認めてしまえば今までの全力ダツシユが無駄になってしまう！

勢いで、押し切る！

「ギリギリ、セーローツフ!!」

そう言いながら勢いを殺すスライディングをしてなのはの10数センチ前で止まる。

なのはならこれで戸惑つて遅刻がうやむやになるはず！

「アウトなの」

そう言つてオレの額を押して、オレを倒した。

「くそう！勢いでうやむやにするオレの完璧な作戦が！」

「それを作戦とは言わない気がするの」

なのははオレが立ち上がるのを見計らうと

「じゃあ、遅刻したサイ君にはバツゲームなの」

「ぐぬぬ、バツゲームだなんてなのははいつの間そんなワルイ子に・・・」

「サイ君と会ったときからなの。特にワルイ子友達のサイ君にはいっぱい迷惑をかけちゃうよー！」

そう言い、なのはは嬉しそうに笑う。

「でも、サイ君にはいっぱいありがたいの。私がサイ君と

出会ってからお母さん達もいっぱい笑うようになったの。お父さんの怪我也治って、私は今、とても楽しいの！」

オレもその言葉を聞いて、嬉しくて自然に笑ってしまう。

「どういたしましてー！」

だからー、その、バツゲームの方は…

「でもバツゲームはべつなの。」

慈悲なんて無かった。

そうして、オレとなのはは秋空のもと夕暮れまで遊んだ。

来年からは小学校だ。

オレもなのはも聖祥大付属小学校を受験する。

元の世界では一般的な公立小学校出身だったからお受験なんて初めてで若干緊張する。

しかし、おそらく魔法少女リリカルなのは、いや、オレのストーリーはそこから始まる。

目指せ！ハートフル日常系コメディ！

自爆なんてしたくない！

☆

「なあ、なのは、本当にやらなきゃダメか？」

「バツゲームは絶対なの。」

「だからって、外でお馬さんごっこは…。」

「サイ君は速いから楽しいの！サイ君はお馬さんに向いてるね！」

「馬に向いてる人間って…。」

「ごちやごちや言っていないでさっさと走るの！」ぱちんっ

「ヒヒーン!!」パカラッパカラッ

「あはは♪速くて気持ちいいのー！」

「… 裁人、あいつ、何やってんだ？」

その後、なのはちゃんはご満悦でうちに帰り、裁人くんはお父さんから何故だか優しくして生暖かい視線で見られたとき。  
ちなみに、夕飯はお母さんだった。良かったね、裁人くん。

## オレ、友達を作る

いきなりだが目の前の状況を整理しよう。

教室に入ったオレ、泣き顔の女子クラスメイト2名、ドン引きしながら遠巻きにクラスを中心に立つ人物を眺める他のクラスメイト、そして、クラスの中心に立つその人物がオレに声をかけてきた。

「サイ君、おはよう！」

高町なのは、このオレの友人がこの変な状況を作り出した張本人なのは明らかである。

「よ、ようなのは。」

オレは疑問を口にした、せずにはいられなかった。

「な、なあ、なにをやったんだ？」

あまりに不明瞭な質問かと思うが、動揺してこれしか言葉がでなかった。

「見て分からないの？二人を仲直りさせたの！」

H A H A H A、仲直りさせた、というよりは支配したが正しいんじゃないか？マイフレンド。

しかしそんなことを言えるほどオレは図太くなく

「お、おう」

そんな返事を返した。

☆

「お前が月村すずか、でお前がアリサ・バニングスか。」

「お前って言わないでよ。」

「へーへー、バニングスさん。」

「すごくバカにされてる気がするからやり直し。」

「バニングス様！」

「それでよろしい。」

今は昼食タイム。オレ的には給食じゃなくて弁当だということに



一番驚いた。

まあ、ママさんの美味しいご飯が毎日食べられるからこっちの方が嬉しいが。

今日の昼食は今朝の惨状の後本当に仲良くなったなのは、月村、バニングスと一緒に食べている。

「二人とももう仲良しさんだね。」

なのはがニコニコしながら言う。

「誰が仲良しよ！」

「そんな！酷いつすよバニングス様！」

「その変な敬語と様呼びやめてくれない？嫌な感じがするわ。」

「けど、先ほどバニングス様がこう呼べって言ったつすよ？」

「アリサで良いわよ！」

「そうか、分かったぞアリサ」

「なんか、すつごくバカにされた気分！」

「アリサちゃん、落ち着いてよ。」

「ぐぬぬ…」

「なんだ、この子すつごく面白い。」

「ははは…面白い男の子だね…」

「すずかちゃん、はつきりと変な男の子って言っていていいよ。」

「あははは…」

「おいなのは、それは言いすぎだぞ。否定は出来ないが。」

「しっかし、なのはもよくこんなのと友達になったわね。」

「こんなのとは何だよ、こんなのとは。否定は出来ないが。」

「なのはとサイ君はただの友達じゃないの。」

「じゃあ、なによ。」

「そう聞かれるとなのはは少しいじわるそうに微笑んだ顔で」

「ワルイ子友達なの。」

「そう言った。」

「…えっ?」

「そんな呆けた返事をした後、月村がなのはに質問する。」

「ワルイ子友達って?」

そう聞かれたなのはオレの方をちよつとだけ向いてから、また月村とアリサの方に向き直り

「私ね、ちよつと前まで何もかもガマンしてて凄く暗くなつたの。」

「今のなのはからは想像できないわね。」

「そうだね。」

「でもね、そこにサイ君がやってきてお友達になろうって言うてくれたの。」

「こいつが、ねえ…。」

「でも、ワルイ子って?」

「サイ君と友達になつたときにね、我慢しないでいいって、ワルイ子で友達の自分と家族にならいつぱい迷惑を掛け合つていいって言うてくれたの。」

そこまで言つてからなのははにかむように微笑んで

「だから、なのはとサイ君はお互いによい迷惑をかけても、ワルイことをしてもいいワルイ子友達になつたの!」

そこまで聞いてアリサがオレの襟元を掴んできた。

「ちよつとあんた!なのはに変なことしてないでしょうね!」

「してねーよ!むしろオレの方が被害がひでーよ!」

「嘘つきなさい!」

争っているオレとアリサを尻目になのはと月村が話を続けてる。

「なのはちゃん。ワルイことってどんなこと?」

「うーん、お気に入りには公園でお馬さんごっこかな?サイ君は足も速くてあまり揺れないから快適だよ!」

それを聞き、アリサと月村がギョツとした顔をして

「な、なんかごめんね、裁人。」

「な、仲いいんだね、鉤矢くんとなのはちゃん…。」

やっぱそうだよね、普通、公園でお馬さんごっこはしないよね。

やっぱり今度復讐してやろうか。何がいいかな。小麦粉爆弾か、水風船でもいいな。

そんなことを弁当を食べながら考えていると、隣のなのはが肩をつついてきた。

何かと思いなのはの方を見ると、なのははいじわるそうに笑って待ってるよ

そう、声を出さずに口だけを動かした。

考えてることが見透かされてるのか？

悔しかったが、少し、嬉しかった。

オレは、鼻をならしてご飯をかきこんだ。

顔が、少しだけ、熱かった。

☆

アリサと月村と友達になった次の日曜日。

今オレはなのはの家族が経営している喫茶店、翠屋に来ている。

理由は簡単、なのはに呼ばれたからだ。

翠屋、聞いたことあると思っていたら町の情報誌に載っていたコー

ヒーとシユークリームが美味しいと噂の喫茶店じゃないか。

普段情報誌なんて見ないがママさんが友達と遊びに行った時凄く美味しかったと言ってその時の情報誌をオレに見せたのだ。

なのはのお陰で1品だけタダでサービスしてくれるそうだ。まさになのは様々である。

さて、ここで2つばかり問題がある。

1つはオレの目の前にある商品だ。

名物であるコーヒーかシユークリームを頼みたいところだが、コーヒーは飲めないしシユークリームを頼もうとしたら目の前の席のなのはが先に頼んでしまった。その時のなのはの視線がこう言っていた。

まさか、同じのは頼まないよね。

ははっ！オレはそんなつまない人物に思われていたらしい。

なのははおそらくここでオレが無理してでもコーヒーを注文すると思っているのだろう。

※因みになのはにそんな思惑は一切無かった。ただのオレの被害妄想だった。

甘いなのは！私にいい作戦がある！コーヒーを楽しめて、さらに苦さを見せつける奇跡的な策が！

ん？今失敗フラグを踏んだような…

まあ、そんなことは些細な問題だ。

コーヒーと甘味を両方楽しめる。

そう、その作戦とは。

コーヒーズリーダ！

ふっ、どうよこの完璧な作戦！

その時は、そう思ってたんだ。

一口食べてあることに気づくまでは。

このコーヒーズリー、最初からシロップがかかってない、だと!?

まずい、いや、コーヒーズリー自体は美味しいのだろう。オレが食べても何か違うと感じさせる。そうじゃなくて、もう一口食べてしまった手前、今しがた発見したミルクとシロップをかけるわけにもいかない。ひっじょーにまずい。

そんなことをしたら目の前で美味しそうにシユークリームを頬張っているようでこちらを注意深く観察するのはに笑われてしまう！

※もう一度言うが全てオレの被害妄想だった。

くそっ！どうすればいいんだ!?

それが1つ目の問題。

2つ目はなのはの兄と思われる人物がこっちに熱烈な視線を送っているということだ。

もちろんアツナ方ではない。若干殺気すら感じる。

なのはは家族にオレのことをどう紹介したのだろうか。

「なあ、なのは、お前の家族にオレのことをなんか言ったか？」

「うん！とってもワルイ子って言ったよ！」

なるほど、お兄さんはワルイ子が妹にまわりつくのが気に入らな

いと。

お兄さん、お宅の妹さんのがワルイ子です。オレに対して。

さして、そんなことを考えながらコーヒーゼリーと格闘していると  
「鉤矢裁人くん。」

んひい！お兄さんがついに声をかけてきた！

「なのはがいつもお世話になってるようだね。」

「は、はい！お世話になってます！」

怖いよ、お兄さん、声が上ずるよ、返事を間違えたよ。おい、なのは、声を殺して笑うな。

「少し、話があるんだが。」

「は、はあ…。」

「ここじゃなんだし、店が終わった後、家に来ないか？」

そこにはNOと言わせない眼力があつた。

正直。パパさんの目つきより怖かった。

コクコクッ

オレはうなずくしかなかった。

緊張で食べたものの味が分からなくなっていた。

お陰でコーヒーゼリーは完食できた。

☆

「翠屋の閉店時間まで公園で遊ぶか…。」

「うん！でもね、サイ君…。」

「何だよ…ヒイツ！って尻をつねるな！何すんだよ!？」

「バツゲームだよ！」

「なんのだよ!？」

「今日、お店で私とあまり喋らなくておにーちゃんと喋ってたの！だからバツゲームなんだよ!。」

「ハハッ、なのはあ… 今日ブランコやろうぜ、一回転の世界を見せ

「やるぜえ…。」

「いや、今日はお馬さんごっこするの！」

「またそれかよ！いい加減にしろ！」

公園までの道を楽しそうに歩く男の子と女の子。その二人の表情はいじわるそうで、照れくさそうで、幸せそうだった。

因みにその後、公園からはヒヒーンという馬の鳴き声らしきものが聞こえたそう。

オレ、オハナシ

オレは翠屋でなのはのお兄さんから呼び出しを食らったあと、翠屋の閉店時間までなのはと公園で遊び、そして今、何故か高町家の道場に居る。ドウシテコウナツタ。

前にここを通りかかった時に道場があるなんてすごい家だな。まあ、運動音痴のなのはには関係ないだろうけどな。なんて思っていたが、まさかなのはの家とは思っていなかった。高町家の遺伝子さんの仕事は宛にならない。外見以外では。

「さあ、かかってこい。」

オレが小さめの木刀を正眼に構えた先には、なのはのお兄さん、恭也さんが普通の木刀を正眼に構えている。

黒髪で整った顔より、オレよりも遥かに高い身長からオレを見下ろす、若く生氣に満ち溢れた鋭い眼光がオレを射抜く。相對しているオレには木刀を構えているお兄さんの周囲の空気が凍ったかのように止まっているのが体全体で感じられた。

正直めっちゃ怖い。

なのはが道場に居なくて良かった。こんなにビビってる姿みられたら後でどう言われるか分からん。

もう一度言おう、ドウシテコウナツタ。

やはり、なのはの周りにつく悪い虫の退治なのだろうか。

プルプル、ぼく悪い虫じゃないよ。

そう言ってもふざけると思われて終わりだろう。

そうして、少しずつ時間がたつ内に目の前からのプレッシャーが大きくなっていく。

正直逃げ出したい。だけど、ここで目の前の勝負から逃げるのは、理由は分からないが、何故か癩に障る。

覚悟なら決めた。

ここは、先手必勝だ！

オレは全力で木刀をお兄さんの頭から胸にかけての体の上部目掛けてぶん投げ、同時に前へと走り出した。

お兄さんは一瞬驚いた目をしたが、すぐさま手首の力で少しだけ木刀を上に向けて振り下ろし、オレの投げた木刀を下に叩き落とした。それでいい。

そしてオレは走りながら拳を後ろに引き、腰を落とす、足を踏み込み、走ってきた速度と自分の体重、その両方を全て拳にのせるようにパンチをお兄さんの金的に向けて繰り出した。

渾身の拳だ。勝つにはこれしかない。

がしかし、オレの拳はヒュツと音を鳴らしただけで、空を突いた。まずいっ！

そう思った瞬間、後頭部に衝撃が走った。

「があッ……！」

「甘かったな。」

上からお兄さんの声が聞こえる。

オレの拳のすぐ横に、お兄さんの金的であろう位置があった。

最小限の動き、腰を少し捻るだけの動きで、オレの渾身の拳はかわされてしまったのだ。

鈍い痛みを意識がだんだん遠退いていく感じがする。

まだ、終われない！

！  
このまま終わっていいのか！いや！だめだ！まだ、終われないんだ

分からない、なにか分からないけど、勝ちたい！

オレの意識は覚醒し、カツと閉じかけていた目を開く。まだ後頭部の少し上にあつたお兄さんの木刀を掴む。

「ほう……やけに頑張るな。」

「一回受けた勝負だ。石だろうが岩だろうが鉄だろうが！何にかじりついてでも勝つ！勝ちたい！勝ってやる！」

「ならばその意地、見せてみる！」

オレが掴んでいた木刀が捻られ、手が離されてしまう。

オレはすぐさま下に落ちていた木刀を掴み、飛び込み前転をする。これである程度の距離は取れた。

オレは体勢を立て直し、再び正眼に構え直す。



お兄さんは向きこそ変わってはいるが、最初の位置から一步も動いておらず、こちらでも再び正眼に構えている。

木刀を投げるのが通用しないことはもう分かった。

けど、正攻法なんて通用するわけがない。

ならば、とオレは構えを変える。正眼に構えていたのを腰構に変え、順手に木刀を持っていたのを逆手に変えた。

「……」

お兄さんはなにも言わずに目を細め、警戒の色を強くする。

オレとお兄さんの間にある緊張はどんどん高まっていき、いつ切れてもおかしくないくらいに張りつめた。

最初に動いたのは、オレだ。

オレは木刀を抜かずにそのまま走り出した。

お兄さんは向かってくるオレに対して、胴はさすがに身長差がありすぎて狙いが定まらなかつたのか、胸に目掛けて木刀を横に薙ぐ。

それに対してオレは速度を落とすことはせずに、姿勢を低くして木刀をかわそうとする。

チツと髪に何かがかする音が鳴る。

頭の上に風が通り抜けた。

それを感じ取った瞬間、

「うおおおおお!!」

気合いの叫びと共にオレは木刀を床に突き立て棒高跳びの要領で跳ぶ。

「んなっ!?!」

そしてにやついたオレの顔と驚くお兄さんの顔、2つが同じ目線になったとき、オレは開いた足をガツチリと閉じお兄さんの体を腕ごと固定した。

そして持ったままであった木刀を素早く順手に持ち替え、その柄でお兄さんの頭を殴ろうとすると

ゴンツ!

という鈍い音と共に顔面への衝撃を受け、体を仰け反らせた。頭突きを食らわせられた。

鼻の奥が熱くなる。痛い。今にも泣き出しそうだ。さっきの衝撃で木刀を手から離してしまった。

だけど！

オレは足はしっかりとお兄さんの体に固定したまま、腹筋を使い仰け反ってしまった体を勢いよく戻し

ゴンッ！

頭突きを食らわせる。

今度はお兄さんの体が仰け反る。

視界が霞がかかってきた。

頭がクラクラする。

お兄さんは足を踏ん張らせて耐えて体勢を戻そうとするが、オレという重りがありうまくバランスが取れずに仰向けに倒れてしまう。

これでマウントを取れた！あとは、叩き込むだけだ！

そして、お兄さんの顔に拳を叩き込もうとする。

その瞬間

ガンッ

脳天に衝撃が走る。

カラッツカラッツ

床に木刀が転がる。オレの持っていた小さな木刀ではない。お兄さんの持っていた、普通の木刀だ。

そうか、木刀を投げて、オレの、上に…

ああ、畜生、悔しいなあ…

くや、しい、なあ…

そしてオレは気絶した。

☆

高町恭也が道場から家に続く廊下を歩いていると、待っていた妹の高町美由希が話しかけてきた。

「どうだった？ 恭ちゃん、なのはのお友だちは。」

「ああ、確かにワルイ子だったな。」

「そう。」

「だが、悪い子ではない。」

「ふふっ、そうみたいだね。」

「？お前はあそこに居なかっただろ？何で分かったんだ？」

「なのはがあんなに嬉しそうに話す子が悪い子のはずがないってことと、恭ちゃんが今、スツゴい楽しそうな顔をしてるからだよ。」

「ん…そんな顔してたか？」

恭也が自分の顔を触り確認していると、前からドタドタと走ってくる音が聞こえた。

「おにーちゃん！サイ君はどの用事は終わった!？」

妹のなののである。よほど裁人が心配だったのだろう。

「ああ、今は道場で寝転がっているぞ。」

「分かった!？」

そう言っただけで元氣そうに道場へ走っていくのはの後ろ姿を眺めながら恭也は

「付き合うのは認めんぞ。」

そう、呟いた。

「もう！恭ちゃんってば気が早すぎるし、心狭すぎるよ!？」

美由希には聞かれていたらしい。

恭也はフンツと鼻を鳴らして、家の方へと歩いていった。

☆

「サイくーん、起きてよー。」

「んんっ…。」

「サイくーん!？」

「むにゃむにゃ… コーヒーゼリー、シロップとミルクアリアリで…。」

「サイくーん!!」ペちんっ!

「んひいっ！」

「おはよう！サイ君！」

「なのはあ……何で起こすのに尻はたく必要があるんだよ!?」

「サイ君だから。」

「意味が分からねえよ！」

少年の表情にはさつきまでの疲れなど微塵も残っていないようで、  
楽しそうな笑顔が。

少女の表情には安堵と、いじわるな笑顔が浮かんでいた。

## オレ、弟子入り

やあ、前回から定期的に高町家の道場に通わせてもらってる裁人くんだよ。

今僕はなのは、アリサ、月村と公園で遊んでるんだ。

お馬さんごっこじゃないよ。

お馬さんごっこをなのはが始めようとしたらアリサと月村が全力で止めてくれた。なのはは不機嫌そうだった。

さて、男子1人、女子3人。男子としては遊びたい遊びができない状況となる。多数決は子供の世界において絶対なのだ。

ダメ元で今日の遊びはサッカーがいいと言った。もちろんオレの意見は握りつぶされた。

「じゃあ、今日はおままごとで決まりね。」

「意義ありー！」

「却下だよ。」

「あはは…我慢しよ？鉤矢くん。」

世界は残酷だ。

「じゃあ、私がお母さんね！」

と、自信満々のアリサ。何に自信があるかは知らないが。

「私がお姉さんをやりたいな。」

なのはは普段は妹だからか、こういうのでは姉役をやりたいんだろうな。

「私は妹がいいな。」

月村は誰とも配役を被らせることなく、皆に配慮した意見を出す。めっちゃええ子や。

「じゃあ、オレがお父さんか。」

残ってる配役で男ができるのはこれくらいだろうと思いき、配役を口にする。

「はあ？」「えっ？」

なのはとアリサの二人から抗議が出た。

「何で私とあんたが夫婦にならなきゃいけないのよ。」

「そうだよ。サイ君はペットだよ。」

まさかの人外である。

おままごとで配役がペットなんて、そんなのクレヨンしんちゃんで見ることがない。

月村にヘルプを求めて視線を送ると、月村は押しが強い二人に強く出れないのか苦笑いしている。

ここにオレの味方は居ないようだ。

「じゃあ、サイ君はお馬さんね！」

「結局馬じゃないか！」

さつきは止めてくれたアリサも今は腹を抱えて爆笑している。月村も笑いを堪えているようだ。

オレは馬になった。

「はい、今日の夕食はハンバーグよ！」

「わーい！」

「いただきまーす！」

そんな家族を模したやり取りがなされているなか、オレはおそらく庭であろう場所に四つん這いとなりブルルルとか時々ヒヒーン！と鳴いていた。

そうしていると、横から一匹のネコが通りかかった。

少し赤みがかった茶色の毛並みをしたネコだ。

こつちを少し哀れんだように見たのでブルルルと鳴いて威嚇する。

「何やってんのよ、あんた。」

アリサがこつちにやって来てジト目でこちらを見てくる、が、オレは威嚇を解かずにネコの方を睨みながら

「いや、ネコに馬の強さを思い知らせようと…」

「ホントに何やってんのよ…」

アリサの目がジト目から変人を見るそれになった。

「でもどこから来たんだろうね。」

「ウチの周りでも見たことないな。」

いつの間にかやって来た月村となのはが会話に参加する。

ネコはなのはを見てビックリとしたような仕草をしてそのままそくさと去っていった。

「なのは、お前ネコに何かやったか？」

「な、何もやってないよ！」

「本当か？」

「そうだよ！私が何かするのはサイ君にだけだもん！」

それを聞いてアリサと月村は顔が真っ赤になっていた。

ただの貴方しか苛めません宣言なのに。何か勘違いしているのだろうか。

ん？ハタから見たらヤバイか？

まあ、でも本人たちにそんな気は無いのだから問題ないだろう。きつと。

その後のおままごとでは月村とアリサの猛プッシュによりオレに人権が認められ、なのはがお母さん役、オレがお父さん役になった。

☆

さて、高町家の道場にお世話になり続けて数週間。毎週土日の朝に稽古をつけて貰えるようになった。

目指すはハートフル日常コメディとはいえ、身を守るものはあつても困らないはずだ。それに、お兄さんに勝てなかったのが悔しかったし。

超再生能力の恩恵か筋肉が着きやすく、転生してから体を動かすのは得意だったため直ぐに上達し、剣術が楽しくなってきた。

なのはの父の士郎さん、姉の美由希さんとお兄さんは普段小太刀の二刀流を使っている。小太刀だけでなく針とか色んな物を使っていたが。

この前は手加減されていたのか。何か悔しいな。

オレは一刀流の基本の型と体の裁き方しか教えてもらっていない。  
オレは士郎さんにその剣術を教えてくださいと頼んだ。

士郎さんは少し困った顔をして

「ごめんね、これは子供に教えるような剣術ではないんだ。」

そう断った。

それを聞いていたお兄さんが

「父さん。」

と言つて少し抗議したが士郎さんとボソボソと少し話し合ったあと。不満ながらも納得したようで離れていった。

その後士郎さんが何か思いついたようで、しゃがんでオレの頭に手を置き、目線を合わせて

「この剣術は無理だが、君に剣術を教えてくださいそうな所を紹介してあげるよ。」

そう提案した。

オレは顔をパアツと輝かせ、コクコクと首を縦に動かした。

そんなこんながあつて一週間後、オレは今士郎さんとお兄さんと一緒に高町家と自分の家から少し離れたある道場に来ている。

見た目は少しボロくさいが年期が入っているといえれば聞こえがいい。少し町外れにあり、周囲には家が見当たらない。そんなところも何か雰囲気が出てる。扉の脇には

「兵法タイ捨流道場」

と書かれた板があつた。

ふふふ、ここからオレの剣術サクセスストーリーが…

そんなことを考えていると道場の扉が開いた。

中から出てきたのは禿頭で、髭はなく、顔には浅くだが皺が入っていて、背筋はピンと伸び、身長も高い。そして何よりも目を引いたのがその眼光だった。お兄さんと相対した時、あの時の眼光より鋭いものがこのお爺さんから発せられていた。それらも相まってとても若々しく感じられる。

何というか、師匠らしい雰囲気である。



ここは第一印象が大事だ。好印象を与えるように気持ちよく挨拶を...

「何だア、士郎、このクソガキが入門者か？」

ピキイツ

「あ？クソジジイ、文句あつかよ？」

そうだな、第一印象で舐められないようにしないと。

「有るに決まってるんだろ、こんな弱っちそうなクソガキが弟子入りに来たなんてな。」

「おう、試してみなきや分かんねーだろ。クソジジイ。」

「ほウ、言うじゃねーか、クソガキの癖に。」

「クソジジイは黙ってる。」

「道場入れよ、クソガキ。身の程を教えてやるよ。」

「上等だ、クソジジイ。ぶっ倒してやるよ。」

そんなやり取りをしてオレはクソジジイと道場の中に入っていく。

「な、恭也。似た者同士だろ？」

「そうだね、父さん。」

そんな声が聞こえたがクソジジイを倒すことしか頭になかったオレには届かなかった。

道場に入ると壁には木刀や手裏剣等が掛けてあった。

中央に堂々とクソジジイが立っている。その佇まいはクソジジイが達人の域に達しているということを表していて、隙が無く、凜としたものだった。

オレは壁に掛けてあった木刀の中でオレに合った小さい木刀を選んで手に取り、正眼に構えた。

一方クソジジイは見たところ道場で最も小さい、刃渡り20センチ位の木刀を持っていて、オレが正眼に構えた所を見たら、木刀を腰にあて、右足を前に、左足を後ろに、体の正面が横向きになるように構えた。

オレとクソジジイの距離は1メートルちよつとといったところである。

「ちなみに、だ、オレの剣術は、こんな小さいのじゃなく、普通の刀を使うぞ、クソガキ。」

カチンッ

「ご丁寧に説明ありがと、よッ!!」

オレは飛び出し、間合いに入った瞬間、木刀をクソジジイの右の脇腹に叩きつけようと刀を左に振りかぶり、右に思いっきり振り

ガツ

「焦んなよ。」

抜けなかった。

いつの間に抜いたのか、クソジジイの木刀がオレの右手首にあてがってある。

そのまま振り抜こうとしても手首を押さえつけられ、ビクともしない。

仕方なく後ろに飛び退こうとした瞬間、右の顔面を衝撃が襲った。クソジジイの拳が右の頬に突き刺さるのを感じた。

オレの体はあえなく吹っ飛び、壁に叩きつけられる。

「今のはここで本来目潰しをする技だったんだがな。まア、若者の未来を奪っちゃいけないわな。」

クソジジイがヘラヘラと笑っている。

痛みなど、怒りで吹っ飛んだ。

オレはすぐさま壁に掛けてあった手裏剣を手に取り、クソジジイの頭めがけて投げた。

手裏剣はオレの手を離れ、真っ直ぐとクソジジイのところまで行った。

カンッ

当然弾かれるが、オレはその間にクソジジイの足下に潜り込み、木刀で足下を払う。

「ほウ、クソガキの割にはやるじゃねエか。」

木刀を振り抜いたが、何も当たらない。

「それ。」

上を向くとそこには既にクソジジイの木刀が目の前まで迫ってき

ていた。

ゴンツ

「ガツ…！」

あまりの痛みに道場に転がってしまった。

しばらくのたうちまわっていると、クソジジイが近付いてきて

「兵法タイ捨流は何でもアリだ。普通の剣にしても跳び、蹴り、目潰し、果てには忍術。そんな剣術だ。タイ捨のタイを『体』とすれば体を捨て、『待』とすれば待つことを捨て、『対』とすれば対峙することを捨て、『太』とすればようやく、自性に至る。」

「これは一回しか言わねエ。タイ捨を極めんとするなら捨てる覚悟をしろ。今までのことに囚われない、自在を目指せ。」

「今日はここまでだ。土日は午前中、平日は夕方に来い。間違っても飯食つてから来るんじゃないやねエぞ。道場を汚したくねエ。」

「…」

オレはクソジジイを睨み付けるだけで精一杯だ。

「分かったら返事しやがれ、ガキ。」

「分かつ、たよ、ジジイ。」

オレは息も絶え絶えに返し、木刀を杖がわりにして道場を去っていった。

途中で土郎さんが

「手を貸そうか？」

と聞いてきたが

「要らない。」

と答えて一人で家まで帰っていった。

☆

「一人で歩いて帰るたア、根性あるな。普通は1、2時間気絶してるぞ。」

「どうですか、彼。」

「ありやア化けるぞ、士郎。修羅か鬼か英雄か、今は分からんが、ガキにはそれだけの力がある。」

「僕としては平和に育ってもらいたいのですが…。」

「まア、それも1つの可能性だ。が、選ぶのはガキだ。」

恭也は自分の父とこの好好爺が何を言っているのか、今は分からない。い。

しかし、1人の少年の背中を見つめる2人の目には、期待、不安、喜び等様々な感情が混じっていること。それだけは分かった。

☆

その日の昼、春にしては少しだけ肌寒い気温のなか、ある公園では1人の少年がベンチに寝ていて、1人の少女がそれを起こそうとしている。

「ねえ、サイ君、おーきーてーよー！」

「わりい、なのは、ちよつと寝かせてくれ。」

「むうー…。」

なのははむくれながら裁人の尻をつねる。

いつもならこれで反応してくるのに、今日は反応が薄い。

「あつーそうだ！」

なのはは何か思い付くと、ベンチで寝転がる裁人の上に寿司のネタとシヤリのように、さらに寝転がった。

「んう… なのは？」

「サイ君、凄くあつたかいね…。」

「ああ、あつたかいな…。」

重なり合いながら寝る少年と少女、その顔はどこまでも幸せそうだった。

オレ、日常？

夢を見ていた。

満月に照らされた夜だった。しかし、満月だけではその場所の闇を照らすには不十分だったらしく、辺りは暗く、木の影しか見えない。

夢の中では金髪碧眼の男の子がナニカから逃げている。

男の子の体は泥だらけで所々に擦り傷も出来ている。

息を切らせながらもその男の子は逃げる。ナニカは先程よりも近づいてきている。

男の子の顔には怯えがあった、涙も見えた、しかし、その目には諦めの色はなく、生きるために全力を出していた。

捕まっちゃだめだ！早く逃げろ！

オレは叫んだつもりだったが、声は自分にすら聞こえていない。声が出ていない。

逃げている男の子はついに木の根に引っかかり、こけてしまった。だめだ！早く起き上がるんだ！

オレが体を動かそうとしても、動かない。  
その時。

(誰か…誰か！)

声が聞こえた。頭のなかに響く、そんな感じにだ。おそらくあの男の子の声だろう。

(誰か、助けてください！)

そうして、オレの意識はだんだん宙に浮いていき、視界がどんどん明るくなり、この夢から引き剥がされる。

待ってる！今助けにいくぞ！

そうして、オレは目覚めた。

☆

「何だ？今の夢。」

目を覚ましたオレはしばらくベッドの上に居ながら、さつき見た夢について考えていた。

ただの夢、と捨て置くにはあまりにも気になる。そんな夢だった。まさか、物語が本格的に始まるのか？

転生してから7年ほど時間が経ち、精神が肉体に引つ張られすぎて既に忘れかけていたことを思い出す。この世界でオレの物語を紡げばもとの世界に帰れるという契約だ。

物語、という指定なのでハートフル日常コメディで過ごそうとしていたが、あの夢のようなことが目の前で起こったらオレは無視できない。それがオレのストーリーがバトルものになる切っ掛けとしても、オレはそこまで非情になれない。

ま、目の前で起こったらの話だが。

そこまで考えていると

「裁くん！遅刻しちゃうよー！」

ママさんの声が聞こえた。

時計を見る。

短針は8を、長針は12の文字を通り越し、今は1の文字に差し掛かったあたりだった。

顔や背中に汗が滲み出してくる。

「ち、遅刻するーっ!？」

オレは急いで着替え、朝食のトーストをくわえながら玄関を出て、学校へ全力ダッシュを始めた。小学校3年生、中学年にもなったばかりで遅刻なんて先生に怒られるに決まっている。

あ、これって転校生とかやってくるフラグかな？パンくわえて遅刻なんてまさにそのパターンだし。

☆

曲がり角で転校生とぶつかること無く学校へ無事遅刻した。そも

そも転校生などいなかった。

パンくわえて遅刻と叫びたら転校生ではないのか。

今のオレは小学3年生。クラスはなのは、アリサ、月村の3人娘と一緒のクラスだ。

そしてある程度新しいクラスの皆とも馴染めてきた今日の日の4時間目、将来の夢の作文の発表をする授業だ。

正直1年生の頃からジジイのところで剣術学んで、ジジイに勝つことしか考えてなかったから将来と言われてもなにも思い付かないのが現状である。

「じゃあ、みなさん。書いてきた作文を机の上に出してください。」  
ん？書いてきた？

あれ？これまさか宿題？てつきり今日書くのだとばかり…ってヤバイじゃねーか！

あわわわ、書いてねーよ、真っ白だよ！

「じゃあ、アリサちゃんから発表ね。」

名簿番号1番の隣の席のアリサが立って将来の夢を発表する。

しかしテンパったオレには何も聞こえず、オレはただただどうやってこのピンチを切り抜けようと考えていた。

忘れました、と言おうか。いや、ここは大学付属の学校だ。遅刻に重ねて忘れ物は、最悪親を呼び出すということになる。この件がもとでパパさんとママさんに怒られてしまうかもしれない。

パパさんの目付きで怒られたら普通に怖い。ママさんを怒らせると1週間食卓から肉が消える。

なのはの方を見る。付き合いの長いなのはなら今の状況を察して何か助け船を出してくれるはずだ。

オレの視線に気づいたなのは手を振った。

やった！オレが宿題を忘れたことに気づいたか！早く！早く助けてくれ！

少し手を振った後、なのははまるでN●K火曜日夜7時のアメリカンコメディ番組のように肩を大袈裟にすくめた。そして、唇だけ動かし声は出さずに

あきらめて

オレは絶望した。

「じゃあ、次は裁人くん。」

来た！こうなったら即興で言うしかない。そうだ、なのはに頼らなくともオレにはこの灰色の脳細胞（自称）がある。小学生の作文なぎ即興で言えるさ！

「はい！えーと、僕の夢は……」

「裁人くん、作文の紙は？」

「…… 忘れしました。」

…… ダメだったようだ。

☆

先生にこつてり搾られた後の昼休み。オレはなのは達と弁当を食べるために屋上に来た。

先生の話が案外短く済んだので教室で急いで食べなくても良かったのだ。

屋上に着くと、なのは達が話をしている。どうやら将来の夢、今日の授業についてのことのようなのだ。

将来の夢、か…… オレは物語を紡ぐとはいえ、何時までの話なんだ？流石に魔法少女というからにはなのはが19歳や25歳までであるなんてことは無いだろう。本編に絡まないサイドストーリーならば有り得るかもしれないが。

神の依頼を達成した時、オレはその場でもこの世界に帰されるのか？それとも、ここで死んだ後にもこの世界に帰されるのか？

そう先のことを考えると将来の夢は簡単には持てない。この世界で持ったところで、この世界で叶えられるとは限らないからだ。

この世界のオレともこの世界のオレは似ているようで違う。人間



関係が違う、思想の観点が違う、そして何よりなのはが…

いや、待て、なのは？何故1人の友人が拳がる？人間関係の内に入るのでは？いや、なんか違う気がする。何かが…

「いひゃいよー！ありふあひゃーん！」

あ、アリサ怒りながらもなのはの頬をつねって伸ばし始めた。

オレは急いで、しかし足音をたてずになのは達の元へ行き、なのはの後ろに回り込んで、アリサがなのはの頬から手を離す瞬間に入れ替わるようにしてなのはの頬をつねった。アリサみたいに伸ばしたりはしないが。

「もお、サイ君やめてよー。」

何故一発でバレた。オレはなのはに屋上に入ったところを見られてないし、足音も消した。完璧なスニーキングだったはずだ。普通はその場に居たすずかがやったもんだと思うはずだ。

「なのは。どうしてすずかじゃなくて裁人だと思ったの？」

「だってサイ君の手だもん。間違えないよ。」

そう聞いて少し顔が熱くなる。

「裁人君愛されてるね。」

「うるせーよ、すずか。」

しばらくなのはの頬を弄んでいると

「ちよつと、何時までなのはのほっぺをつねってるのよ。」

アリサに怒られてしまった。

「あ、悪い。」

そう謝罪してなのはの頬から手を離すと

「あつ…。」

なのははどこか残念そうな顔をした。

その頬はオレがつねっていたからか赤く、瞳は潤んでいた。

そして、上目遣いでオレを見て

「もつと、触っててもいいよっ。」

それを聞いた瞬間オレの頭にはモヤがかかったかのように何も考えられなくなった。顔だけではなく、体まで熱くなっていく。

オレはなのはの頬に右手を当てた。

「んっ…!」

なのはがくすぐったそうな声をあげる。

そのままその手で頬をつねることはなく顎に移動させ、頬の代わりにその親指と人差し指で軽くなのはの顎を掴み、そのままなのは顔を上に向ける。

なのはの頬は先程よりも赤くなり、オレの顔も先程よりも熱い。

なのはは目を閉じ、唇をほんの少しだけ前に出す。

オレはなのはに顔を近づけ、そのまま…

「つてなにやってんのよーっ!!」

「レバーっ!?!」

アリサが飛び蹴りをオレの脇腹に食らわせた。

地面に2回転がったあと、頭にかかっていたモヤはすっかりと消えて、思考が冴えてくる。

何やってたんだよオレ!なのはとキ、キスしようと… そうだ!なのはは!?

なのはの方を見るとなのはの顔は赤くなっていた。だが、その顔には羞恥と同時に先程と同じような残念そうな感情が混じっていた。

キーンコーンカーンコーン

予鈴が鳴り、オレたちは急いで教室に帰るが終始無言だった。

あっ… 弁当食ってねえ…

☆

その日の帰り道、オレとなのは、アリサ、すずかで、帰っていた。た。

無言で帰っていたが、公園に差し掛かったとき

「あ、あれ!」

なのはが何かを見つけた。

「これは、イタチか？」

「フェレットじゃないかな？」

「怪我をしてるじゃない！」

アリスの言うとおりでそのフェレットは全体が泥で汚れ、所々に傷を作っていた。

「近くに動物病院があったはず！連れていくよ！」

オレたちはそのフェレットを近くの動物病院に連れていき

「ひどい怪我だね、でももう大丈夫だよ。」

という医者の声に安心した。

医者にフェレットを預けたあと、塾があると言って急いでいたアリスやずかど分かれて動物病院から出た。

帰り道には空はまだオレンジ色なのに月が浮かんでいた。

限りなく満月に近く、満月から少し欠けた月だ。

そういえば、昨日は満月だったな…

そんなことを考えながら、オレとなのはは歩き出した。

☆

夕方、少し月が顔を覗かせている頃、少年と少女が歩いていた。

「いてっ!? って何で尻つねってんだよ！」

「今日サイ君が私のほっぺをつねったからだよ。」

「じゃあほっぺをつねろよ！ほっぺを！」

「今日サイ君がなのはにエッチなことをしようとしたからだよ。」

「うっ、それはだな…」

少年が戸惑っていると、少女は

「二人きりの時にしてよ…」

蚊の鳴くような声で言った。

「え？何だって？」

「何でもないよ！」

少女は笑顔になり、走り出した。

その顔は夕陽のせい  
か、赤かった。

## オレ、魔法

一旦家に帰った後、オレは夕食を食べずにジジイの道場に行き、稽古をして帰って来た。

稽古のお陰か最近ではジジイに6回以上打たれても気絶しないようになってきた。ジジイとの稽古で変わったのはそれぐらいだ。あれ？打たれ強くなっただけじゃね？

まあ、そう感じるのはジジイ相手だと未だに軽くあしらわれるので成長がまるで実感出来ないからだ。

お兄さんはオレの成長を感じてか、最近では小太刀の二刀流で相手してくれるようになった。結果は言わずもがな。てかジジイ強い。お兄さんも負けていた。

今日の稽古で約20回打たれてボロボロだった身体も『超再生能力』のお陰ですでにピンピンだ。

因みに2時間の稽古で気絶したらそれが休憩時間だ。ちよつと時間が経つとジジイが水を掛けて目を覚まさせてくる。

普通はここまでされると嫌になって投げ出す。オレが目指すのは Heartful Comedyだ、決して Hurtful ではない。でも、諦めきれない。お兄さんに勝つまでは、ジジイを打ち負かすまでは、諦めたくない。悔しいままで終わりたくない。

これは意地だ、見栄だ、ワガママだ。そんなの分かっている。でも、譲れない、絶対に。

さて、次の稽古では何をしてやろう。小麦粉爆弾や水風船はもう使った。爆竹もだ。卑怯？色んなものに囚われないのがタイ捨流だ。なに、手裏剣が他のに変わっただけでジジイも許してくれたし。

はっ！道場の床にワックスを塗ってツルツルにしてジジイを滑らせるのはどうだろう？これでジジイに勝てる！

そうと決まったら次の土曜日の稽古でやるか。くくく…首を洗って待つてろよ！ジジイ！

そこまで考えていると、頭の中に声が響いてきた。

(助けて下さい！)

ん、この声は…ダメだ、思い出せない。何処かで聞いたことのある声だ。それは分かる。だが、何処で聞いた？何処から来てる？

次にオレの頭の中にノイズと砂嵐混じりの映像が流れてきた。

始めに見えたのは月だ。満月から少し、ほんの少しだけ欠けた月だ。次に見えたのは黒いナニカ、そしてそれに襲われる動物。最後に見えたのは、今日フェレットを預けた動物病院だった。

黒いナニカ、月、それを見てオレの中で何かがカチツとはまった。

これは、そうか、昨日の夢か！

しかしおかしい、オレは今起きている。白昼夢というわけでもない。現在自分でほっぺをつねっているが、痛い、夢から覚めたという感覚は無い。

胸騒ぎがする。嫌な予感だ。

だー！なんか嫌な感じだ！無駄かもしれないが見に行ってみよう。動物病院なら走れば結構直ぐに着くだろう。

そうしてオレはパジャマからジャージに着替え、ジジイの道場からこっそりくすねた木刀を一振り持って家から出ていった。

パパさんとママさんに見つからないよう、忍び足で。

☆

走って動物病院の近くに来ると、辺りが騒がしくなってきた。何らかの破壊音もする。

嫌な予感の中したか。だったら非常に不味い！

オレは急いで動物病院に向かうと、ある光景を目にした。

一人の少女が、フェレットを抱えた少女が黒いナニカに向かっていった。

そして、その少女へ黒いナニカから出た触手が迫ってくる。少女は立ち尽くしたまま動かない。否、動けないのだろう。この距離からで

もその怯えが見える。

その少女を見た瞬間、オレは頭が真っ白になり一目散にその少女のもとへ行った。

「なのはあああああ!!!」

オレは勢いのままその少女、なのはと黒いナニカの間飛び込み、なのはへと迫っていた触手へ木刀を振り抜き、叩き潰した。

ぐちゃあ

触手が潰れる。黒いナニカは悶えている。

オレはすぐさまなのはの方へ向き、なのはの安否を確認する。

「なのは！大丈夫か！」

「サイ君！」

なのはは安堵した表情になるが、なのはの瞳の端には涙があった。オレは黒いナニカへと身体を向けた。

声が荒ぐ、自然に手に力がこもる、眼は血走り、頭に血が上っているのが分かる。

あいつが、あのナニカが

「あいつがなのはを泣かせたのか…！」

オレは左足を前に、右足を後ろに、身体はナニカに対して斜に構え、木刀を両手で持ち、切っ先は自分の後ろにぶら下げる。

「サイ君。」

後ろからなのはの声が出た。

「あの怪物を倒せる手段が私にはあるみたい。だから、それを準備するための時間稼ぎは出来る？」

「へっ、当たり前前だ、何だったら倒してもいいんだろ？」

「心強いよ。」

そこで聴いたことはあるが、実際に聴くのは始めてである声がした。

「な、なのは！大丈夫なの!？」

おそらくあのフェレットの声だろう。それを安心させるためにオレは答える。

「おう、安心しろ。伊達にタイ捨流やってるわけじゃねえよ。」

「そ、そうじゃなくて！あれは…。」

フェレットが何かを言い終わらないうちにナニカからの触手が襲ってきた。

「セイヤアアアッ！」

掛け声と共に伸びてきた触手に斜めに斬り込む袈裟斬りを浴びせる。

ぶちぶちいッ

という音がして触手が地面と木刀に擦り潰されちぎれる。

「はっ！あと何本だよ、タコ野郎！」

ナニカは次々と触手を放ってくるが、オレはそれを尽く必殺の袈裟斬りで切り伏せ、ちぎっていく。

が、十何本目の触手を斬った頃、オレの腕が触手に掴まれた。

「んん!?全部斬ってたはずだぞ!？」

足元を見ると、オレが斬った触手が全て再生していた。

「そいつはジュエルシードによって産まれた、型となる元がない魔法生物です！魔力がある限り再生します！」

フェレットがオレに先程言いそびれた情報を与えてくる。

「そんなんありかよ!？」

「サイ君！」

「やつぱり…魔法の使えない現地住民を巻き込むべきじゃ…。」

なのはが悲痛な表情でオレを心配する。フェレットが絶望の表情で俯く。

なのはにそんな表情は似合わない、フェレットの絶望が心に痛い。

何より、やるべきことを出来てない自分に腹が立つ。

やるしかないか…。

「おい！フェレット！」

「はい!？」

オレが強く呼び掛けると、フェレットがそれに答える。

「さっさとなのはにコレを倒す手段を教えろ！」

「でも…。」

フェレットが迷う。



「オレは時間稼ぎを引き受けたんだ！心配すんな！」

それを聞いてなのはは覚悟を決めた表情になり

「続きを教えてください！」

それを聞き、フェレットも覚悟を決めた表情になり

「うん、分かった。」

そう頷いた。

さて、触手は既にオレの右腕全体に絡まっていた。次に身体を縛ろうと触手を伸ばすが、オレは自分を縛ろうとしている触手を掴んだ。

「さあ、一緒に吹っ飛ばうぜ。」

そして右腕に満ちていた力を微量、極繊細なイメージで放出し、赤黒い光が一瞬だけ煌めく。

ズドオオオオオオオオン!!!

赤黒い爆発が起き、ナニカの触手は吹き飛び、ついでにオレも吹っ飛ぶ。

爆発音にビツクリしたなのはとフェレットがこっちへ声をかける。

「サイ君！大丈夫!?!」

「大丈夫ですか!?!」

「続ける！」

心配の声に対して痛みを堪えながら一喝し、ナニかを倒す方法を教えることへの集中だけを促す。

化け物の方を見ると、悶えてはいるが既に触手の再生が始まっていた。

対するオレの腕はもう既に再生が終わっており、爆発で無くなってしまったジャージの右腕部分からは風呂場で見ると変わらない腕が伸びていた。

オレの再生力は化け物以上かよ。ちよつと傷つくな。

さっきの爆発で木刀は粉々だ。しかもオレの腕に、いや、全身に爆発の痛みが残っている。もう一回爆発を起こせばそれこそ気を失ってしまうだろう。

ナニカが動き出した。なのはに向けてではなく、オレに向けて触手を放ってきた。

それでいい、これで時間稼ぎになる。

触手が腕に絡まる。腕が動かしにくくなる。力が入らない。

身体に絡まる。もう完全に動けない。

首と頭に絡まる。息苦しくなる。

今だ、気を失ってもいい、爆発して…

しかしその時、なのは声が聞こえた。

「我、使命を受けし者なり。

契約の下、その力を解き放て。

風は空に、星は天に。

そして、不屈の心はこの胸に。

この手に魔法を。

レイジングハート、セット・アップ！」

「stand by ready. set up.」

なのはの服装はみるみるうちに変わり、オレ達が通う小学校の制服をアレンジしたものになり、その手には杖が握られている。

ナニカはそれを見た瞬間、急いでなのはに触手を伸ばすが

「protection.」

という言葉と共になのはの周りにバリアが張られ、触手を弾く。

そして

「封印すべきは忌まわしき器。ジュエルシード！」

「ジュエルシードを封印。」

「sealing mode. set up. stand by r

eady.」

「リリカルマジカル。ジュエルシード、シリアル21。封印！」

「sealing. receipt number XXI.」

杖から光が放たれ、ナニカは消えていった。

ナニカが消えた後には青い宝石が現れた。

「これが、ジュエルシード…」

なのはがそう呟く。

ジュエルシードとは何か、さっきのは何なのか、聞きたいことは  
いっぱいあったが

ウーウーウーウー

というサイレンの音が鳴り、それを聞くことは出来なくなる。

辺りを見渡せばクレーターがあり、辺りはボロボロ、さらに小学生が夜中に此処にいる。

何処を取つてもヤバイ。

警察に事情を聞かれて何を言えばいいのだ。

オレとなのはは顔を見合せ、ひとつ頷くと

「逃げるぞーなのはー！」

「了解！」

オレはフェレットを抱えてもう片方の手でなのはが転げないようなのはの片手を握って走り出した。

「ごめんなさいー！」

誰に向けてか分からない謝罪を添えて。

☆

夜中に小学生らしき男女がフェレットを連れて歩いている。

「ところでなのは、服はどうなってるんだ？」

「え？あ、そうだね。服はどうなるの？ユーノ君。」

「ちゃんとバリアジャケットを解除すればもとに戻るよ。」

「へえー、何かそれ便利だな。しかし、脱げないのか。お色気シーンが消えて残念というか何というか…。」

少年、裁人は後半部分を呟くように言ったが、少女、なのはには聞こえていたようで

「な、何を言ってるの！サイ君のバカーツ！」

顔を真っ赤にして手に持っていた杖で裁人の尻を叩く。

「んひいー！」

裁人は悲鳴（？）を上げて道路に倒れる。なのははそのまま走り去って行った。

「なあ、フエレット。」

「あ、ユーノ・スクライアです。ユーノと呼んでください。」

「おう、鉤矢裁人だ。裁人って呼んでくれ。」

「はい。」

「で、だユーノ。」

「何でしょう？」

「魔法の杖って、木製でなく金属製なんだな。痛い痛かった。」

「えっ、木製のを受けたことがあるんですか？」

それを聞くと裁人は暗い表情になり

「馬の鞭は革製だよな、決して木の棒じゃないよな……」

「なんか知らないけど、ごめんなさい……」

一人と一匹はため息をつきながら帰っていった。ユーノは今晚家に泊めることにした。

それと、裁人はジャージを破ってしまったのでママさんからお尻ペンペンの刑が後日執行された。

## オレ、約束

やあ、昨晚はユーノと一晚を過ごした裁人だよ。エロい意味じゃないよ。てかユーノは雄だよ、フェレットだよ。

ユーノには色々なことを聞いた。ジュエルシードのことや魔法のこと。

ユーノによるとこの世には魔法なんていうビックリなものがあるらしい。な、なんだってー、それはしらなかったなー。

あの時ユーノが出したSOSサインも魔力を使った念話という、いわば機械無しの魔法版トランシーバーだ。魔法便利だな。

調べてみるとオレにも魔法を使うための魔力というものがあるらしい。な、なんだってー（以下略）

使うとその場で自爆だから使えないんすよ、ソレ。

でもそんなことを知っているとはいえなかった。何故知ってるのか怪しまれてしまうからな。

まあ、そんなことを話した後、お互いにあの化け物の件で疲れていたの直ぐに寝てしまった。

そしてオレは今ユーノを連れて学校に来ている。勿論鞆のなかに隠してだ。これ以上先生に目をつけられるのは怖い。

「サイ君！昨日のことはごめんなさい！」

「おう、流石に金属は痛かったぞ。」

「そっちじゃなくて…。」

「あ、そっちは謝らないんですね…。」

そっちじゃないとしたらどれだ？何も思いつかんぞ…

「昨日は巻き込んだんじやってごめんなさい…。」

「巻き込んだ？何に？」

「あの、ジュエルシードの…。」

オレはなのはの言葉に割り込んだ。

「オレたちはワルイ子友達だったよな？だったら、ごめんなさいじゃないだろ？」

その言葉になのはは俺の言おうとしていることに気づいたようで

「うん、そうだったね…。これからもよろしくね！サイ君！」

なのはは満面の笑顔でそう言った。

そうだ、オレとなのはの間に遠慮はいらない。なのはとオレの間に同情なんて必要ない。

「おうよ、なのは。」

だってオレたちはワルイ子友達なのだから。

「だけどよー、ケツ金属バットは許されないぞー。今回は許されないぞー。」

「サイ君がエッチなこと言うからだよ！」

「んだとー!?てか、何でケツばっか狙うんだよ!?」

「サイ君はお尻が弱点だからね、どこをはたいても起きないのに、お尻をはたけば1発で起きるんだよ。」

なにおう!?そんなわけあるかあ!…。ないよな？

「と、とにかく!今日の罰ゲームはお前だからな！」

「むー…」

なのはが不服そうに頬を膨らませる。はっはっはっ、愉悦愉悦。

「さて、何をしてやろうか…」

オレがどんな悪戯をしてやろうか考えてワルイ顔をしているとなのはの顔がみるみるうちに紅潮し

「また、エッチなことするの…?」

上目遣いでそう言ってきた。オレの頬も熱を帯びていく。

しかし上目遣いでこちらを見るなのはの顔は不安とは違った顔だ、いや、不安はあるのかもしれない。けどそれよりも好奇心と…

(ふ、二人とも!何してるのさ!そ、そんなエッチなことなんて…) ユーノの念話がオレとなのはの頭に響く。

はっ!ユーノのことを忘れていた!

今の念話はなのにも届いていたようだ

「サイ君、ユーノ君を持ってきたの?」

「ああ、オレの家だとユーノを置いておけないからな。ママさんに見つかるとうなるか分からん。」

(だからあんなに慎重に僕を隠したんだね…)

昨日の夜、家に帰ったあとパパさんママさんに見つからないようにユーノを運ぶのは大変だった。玄関開けたらママさん仁王立ちだったんだもの。そのまま爆発で破れたジャージも見つかってメチャクチャ怒られた。けど、何とかユーノだけは隠し通したのだ。

「うーん、ウチなら大丈夫かも。」

「本当か？なのは。」

「うん、家族みんな動物好きだし。」

(僕はどつちかかっていうと裁人の家がいいな。でも、毎回隠れるのはちょっと嫌かも…)

「うし、じゃあなのはの家で決定だな。」

キーンコーンカーンコーン

そこまで決まったところでチャイムが鳴った。オレは急いで自分の席に着き、学校で決められてる朝読書の本を読む。

あ、本忘れた。まあ国語の教科書でも読むか…

適当なページ選んでつと…『ごんぎつね』か。

転生してから教育に関する知識はすべて消えているらしい。じゃないとオレが小学校のテストの順位で下から数えた方が早いなんてことはない…。ないはずだ。

という訳でオレは読んだことのあるはずのものも忘れてる。だからこの『ごんぎつね』も知らない。題名からして狐のハートフルストリーだろう。小学校の教科書だし。

あ、そういえばなのはの罰ゲームを水に流された気がする。

まあ、昼か帰りに言えばいいや。

☆

「うう…ごんも兵十も悪くねえんだよお…」

「もうサイ君、泣き止んでよー」

その帰り道、オレは泣いていた。いや、朝から一日中泣いていた。ごんと兵十、二人(?)の間に起きた些細なすれ違いにだ。

「ごん、兵十…グスン」

「ユーノ君も!？」

ユーノはオレの鞆のなかで『ごんぎつね』を読んだのだ、ていうかオレが読ませた。

「もう、サイ君お昼ご飯の時にも泣くんだからアリサちゃんも気味悪がってたよ。」

「すずかは泣いていただろ? 『ごんぎつね』を読んだことがあるって言ってたし。」

「読んでない人からしたら不気味だよ… 教えてって言ってもサイ君は泣くだけだし、すずかちゃんも読まなきゃダメだって言うし…」

当たり前だ、あの感覚は口では説明できない。

あ、思い出したらまた泣けてきた。

「ごん、兵十…」

「二人して泣かないでよー!」

なのははそう言っつてむくれつ面をしたあと、アニメであつたら豆電球が点くような、何かを思いついた表情になり

「そうだ! ユーノ君、あの頭のなかに声を届ける魔法を教えてください! アレがあれば学校にいるときでも話せるよ!」

「どうやら話題を替えにきたようだ。」

「ああ、念話は凄く簡単だよ。こんな風に魔力を集中させて相手に送って」

(こういう風に届けるんだ。)

頭のなかにユーノの声が響く。

「うーん、こんな感じ?」

(ザツ… ザザツ…)

しかし今度頭に響いたのは昔のアナログテレビの砂嵐のような、接触の悪いイヤホンから出るような音だった。

「うー、出来ないよお…」

「どうやらなのははまだ難しかったようだ。」



「まあ、デバイスがあれば絶対に出来るしそんなに気にするものでもないよ。これから絶対に出来るようになるだろうしね。」

「分かった！高町なのは、努力します！」

「そうなのは胸を張って宣言する。」

うーむ、しかし念話か…。この場合はどうなるんだ？俺にもできるのか？

よし、やってみるか。

たしか、こう、魔力を相手に届ける感じで…

(ボカッ！)

その場にいる全員に爆発音が聞こえて、なのはとユーノはビクッリして飛び上がり腰を抜かす。

「さ、さ、さ、サイ君!!今のは何!?!」

「な、な、な、何で念話で爆発音がなるの!?!」

あ、そういえば爆発のこと言っていなかった。

うーん、もうこの際だから転生以外のことは全部話しちゃおう。

「そ、そ、そ、それには深いわけがあるんだ。」

魔法の言葉カクカクシカジカでなのはとユーノにオレの『魔力変換資質：自爆』と『超再生能力』を伝えた。体の中に何かエネルギーがありそれを外に出すと爆発すること、そして怪我の治りが異常に速いこと、という風に転生のことを避けて矛盾点が無いように話した。

「そ、そんな…。じゃあ、裁人はもしかしたら魔法を使えないのかもしれない…。」

「どういうことなの、ユーノ君?」

確かに。オレが言ったのはく魔力が体から出ると爆発する>ということだけだ。それだけでユーノはオレが魔法を使えないという結論に至ったのだ。

「普通、魔力が多すぎたり魔法が不完壁だと起こるのは魔力の暴発だ。決して、魔力の爆発じゃないんだ。だから裁人のそれはきつと魔力が爆発するっていうレアスキル、体質のようなものなんだろう。」

「じゃ、じゃあ魔法でサイ君と一緒に戦えないの?」

「うん、そうなるね。」

「そんな…」

と、なのはが落ち込んでいる。

きつとなのは今朝のこと、ジュエルシールド集めに協力することが出来ないと思っっているのだろう。当然だ、魔法がなければそれは危険すぎる。

「おいおい、オレの運動神経の良さを忘れたか？暴走前のジュエルシールド集めには役立てるぜ？」

「うん…： そうだね！」

そうだ、戦うとは別に戦闘のことだけではない。なのはに任せてオレはのうのうと過ごすなんて出来ない。

「けど、本当は関係者以外、なのはも戦わせちゃいけないんだ。危険なことに民間人が首を突っ込むのは危ないからね。やっぱり、僕一人で…。」

はあ…： こいつは何を言っているんだ？

「ねえ、ユーノ君。」

「なんだい？なのは。」

「一人で何かをしようとするときの辛さは私にも分かる。ちっちゃい時の私がそうだったからね。」

「なのは…。」

「そうだぞ、ユーノ。一人より二人、二人より三人だ。それにき、オレ達とユーノはもう友達だ。ワルイ子友達だ。」

「ワルイ子、友達？」

ユーノが少し涙ぐみながら聞く。

「うん、ワルイ子友達っていうのはね、お互いにどんなに迷惑を掛け合ってもいい、どんなことでも許し合える。そして、一緒にいると心がポカポカする。そんな大切な友達のことなんだよ。」

「だから、オレとなのはに頼れ、ユーノ。オレも魔法が使えないなりにサポートするさ。」

「二人とも…： グスン、ごめんね…。」

そして、オレとなのはは互いに顔を合わせニッコリとワルイ、満面の笑顔で

「おいおい、ユーノ。ワルイ子友達の間にごめんなさいはないだろ?」「  
「そうだよ、ユーノ君。ごめんなさいじゃなくて...」

そう、ユーノにアノ言葉を促す。

ユーノは涙を拭い、俺たちと同じ、ワルイ、満面の笑顔で(まあ、フェ  
レットだったからあまり分からなかったが、雰囲気から確信した。)  
「ありがとう。」

「頑張ろうぜ(よ)、ユーノ(君)ー!」

夕焼けの中、俺たちは誓った。友達の、ワルイ子友達の約束だ。こ  
れが物語の始まり、この先10年以上続く物語の幕開けだった。

☆

「あ、そうだ!サイ君、私にあんな隠し事してたんだから、今日の罰  
ゲームはサイ君だよ。」

「はあ!?今日の罰ゲームはなのはのはずだろ!」

「罰ゲームって何?まさか、エッチなことじゃ...」

「違う!まあ、一種の遊びだよ。相手に何でも命令できるっていう遊  
びだ。」

「やっぱリエッチなことじゃないか!」

「何でそうなるんだ!」

「さ、サイ君は、エッチなこと...したいの?」

「違う!」

「き、君がそんなにエッチな人だったなんて... 大丈夫だよ、僕たちは  
友達じゃないか。」

「誰かオレの話を聞けええええ!!」

結局、公園でお馬さんごっこをすることになった。

「裁人... 大変だね?」

「おまえユーノ、分かっててやってたな?」

# U A 1 0 0 0 0 突発記念 i f 短編 自爆ヒーローゼ ンラマン 前編?

「別に、倒してしまっても構わんのだろう?」

少年、鉤屋裁人はフラグを建てた。まるで某弓兵が強大な敵に挑むときのように。

「サイ君、それを今言うのは不味い気がするよ」

少女、高町なのははそれを諫める。

「二人とも、今はそんな場合じゃないでしょ!」

フェレット、ユーノ・スクライアの言うとおりである。今、二人と一匹の目の前に化け物があり、なのははまだユーノに魔法を教えるもらっていないので魔法を使うことが出来ない。

所謂絶望的といった状況だ。

「大丈夫だなのは、俺にいい考えがある」

「さらに重ねたね」

実際のところ、裁人には秘策がある。奥の手と言ってもいいそれは本来なら使用を躊躇うような代物である。

それは自爆。

もちろん、普通の人は爆薬でもない限り出来ないだろう。しかし、裁人にはそれが出来た。彼の転生特典である『魔力変換資質・自爆』があるから。

自爆といっても彼が死ぬわけではない。彼のもうひとつの転生特典、『超再生能力』の恩恵で死ぬことはない。

しかし、自爆には壮絶な痛みが伴う。それこそ、痛みで気絶することもあるし、なにより周りへの被害と説明が想像も出来ない。

だから本来なら体の一部だけを自爆させる。それでなければ酷い被害が出る。

「いっけ...!」

そう、少年もそうするだろう。

「ひゃっはー!!自爆だー!!」

そう言つて少年は黒い化け物に突つ込んでいき、全身を爆破させた。

ド　ワ　オ　！　！　！

赤黒い光がなのは達の居た場所を包み込み、その後、壮絶な爆発音が聞こえた。

そう、普通なら体の一部を爆破させるだろう。裁人がバカでなければ。

しかし哀しいかな、彼はバカだったのだ。それも重度の。

「サイクーン!? いやああ!!」

「じ、自爆!? 魔力をそのまま爆発させた!? うわあ!!」

なのはとユーンは爆風で10m程吹き飛ぶ。幸い、二人は爆心地からある程度遠かったので大きな怪我にはならなかった。

爆発が収まったあと、そこには暴力的な跡が残った。

「す、凄い...!」

「サイ君!? どこなの!」

爆心地を見るとそこには青い宝石を手に持った裁人が倒れていた。ほぼ全裸で。

二人がほつとしたのも束の間、今度は大きな揺れが襲ってきた。

「な、なに!? これは!?」

なのはが驚くのも無理はない。地震大国とも言われる日本、ここでもこの揺れは経験することはない。何故ならば、空間そのものが揺れているからだ。

「次元震だ! あれほど膨大な魔力をぶつけたんだ、起きないはずがない!」

バリバリイ!

爆心地、もつといえれば裁人の右手の中の宝石、そこから空間を裂いて歪みが生まれた。

裁人はその歪みの中に徐々に飲み込まれていく。

「サイ君!」

「近づいちゃダメだ! 君まで飲み込まれる!」

そうして遂には頭と左腕しか見えなくらいまで歪みに飲み込ま

れてしまった裁人は今まで閉じていた口を開き、左手を握りしめ、親指を立て

「I' ll be back.」

「シユワ… サイクーン!!」

そうして裁人は地球から消えた。

☆

「ええ…」

青年、ティード・ランスターは戸惑っていた。

目の前にいる全裸で寝てる少年にだ。

正確には全裸ではない。体のあちこちに布だっと思われるものが巻き付いているからだ。

ただし、重要なところは見えていた。

幸いティードは今朝のランニング中で人通りも少ない場所を通っている。騒ぎになる前にここから立ち去り無関係を決め込むのは簡単だ。

「仕方ない、家に連れて行くか」

しかしティードは心の優しい青年だった。お人好しだった。

彼はそのほぼ全裸で寝ている少年を背負って家族が妹しかいない家に帰っていった。近所の人に見つからないように猛ダッシュで。

☆

時はいきなり10年後に移る。

かつて少女であったなのも成長して今では19歳。

彼女はあの時消えた幼馴染、魔法、そしてそれから出会った友人、それらの経験を得て管理局に入隊していた。

あの時幼馴染を失った後悔、その感情をもとに一人でも多くの人を救うために管理局の仕事を意欲的にこなしていた。

今は友人である八神はやてが創設した対ロストログアの部署、機動六課に在籍しており、その中の部隊の1つをまとめあげる立場に就いている。

さて、そんなのはだが、彼女は今困惑している。

「だあかあらあ！何で指名手配犯捕まえて管理局に差し出してんのに懸賞金が貰えないんだよ!？」

「そんなの、貴方が犯罪者だからですよ！この女性とPTAの敵！」

「んだとお!?!オレはこうして指名手配犯捕まえて正義に貢献してんじゃねーか!さてはお前バカだな!?!バーカバーカ！ブワァーカ！」

「そんなの言ったらそつちがお馬鹿ですよ！この性犯罪者！」

たまたま通った道で女と男が口論していた。

これだけならただの痴話喧嘩だと思っただろう。

足元に転がっている縄でがんじがらめにされた手配書に顔が載るほどの次元犯罪者と、口論している女が管理局の制服を着ていて、男が顔につけている狐の仮面以外の一切の衣類を身に着けていないことを除けば。いや、辛うじて男を象徴する部分は葉っぱで隠している、生きているだけでラッキーなスタイルだ。

いや、確かに”痴”話喧嘩ではあるのだろう。男の葉っぱ隊スタイル的な意味で。

「もう！賞金払わなくても次元犯罪者が捕まるからって放置してる上の意向なんか知ったこったないです！今日こそあなたを捕まえます！」

「やべっ！」

管理局の女は自分のデバイスを起動させ魔力を込め、魔法を発動する。

それを見た狐面の男は慌てて女に背を向け一目散に走って逃げ出そうとする。

「バインドー！」

「うおっ!?!」

男の手にはさつきまでなかった光の輪が掛けられており、その手はどんなに男が頑張ってもその場から動かすことが出来なくなっていた。

「へっへっくん、どんなもんですか!」

女は自信満々にドヤ顔を決め、確保のために男に近づくと

「待った!」

男からの静止の声がかかる。

「これ以上近づくな、危ないぞ」

当然、現状の立場としては捕まってる犯罪者の男が下、捕まえてる管理局の女が上だ。女にはそんな事を聞く道理はない。

「なにが危険ですか! 貴方を放置してる方が世間にとって危険です!」

「忠告はしたぞ」

そんな男の言葉を無視して女が男に近寄ると

ボンッ!!

赤黒い閃光と共に爆発が起きた。

「キヤアッ!」

女は近づき過ぎていたせいでふっ飛び、地面に大きな尻餅をついてしまう。

「ふははは! また会おう!」

男は女が動けないうちにとんでもないスピードで走り去っていった。

「もう会いたくないですよ!」

なのはは動けないでいた。

呆然としていたわけではない。愕然としていたのだ。

あの赤黒い閃光と爆発。見たことがあるなんてもんじゃない。あれは、あの光景は、彼女が管理局を目指した根底であった。

なのはの心から、あり得ないと思いつつも1つの可能性が離れなかった。

自分の始まりである少年、鉤矢裁人は生きている。

次元震に巻き込まれて生き残る確率はほぼ0だ。ほぼ0というの



は実証するデータが少なすぎて正確な数字が出せないだけで、今までの例で生き残った人物は0だ。

諦めていた。でも、生きているのかもしれない。

そのことだけで胸がいっぱいになる。

涙が溢れそうになる。

「あーもしかして、なのはさんですか!？」

さっきの管理局の女がこちらに気付いたように声をかけてくる。

とっさに涙を押し込めそれに応対する。

「うん、そうだよ」

「わあ!本物だあ!あ、あの、私、なのはさんのファンなんです!管理局に入ったのもなのはさんに憧れたのがりゆうなんです!」

女は顔をパアツと輝かせ、まるで仔犬のようになつてくる。

「ありがとね。ところで、さっきのは?」

それを聞くと女は顔を青くして

「二重の意味で本つつ当にお見苦しい所をお見せしましたあーっ!!」

地面に頭がぶつかるんじゃないかという程に頭を下げる。

「いやいや、あれじゃ武器を持って無いつて思っちゃうよ。」

「うう... ありがとございます...。アンチクシヨウは自称正義のヒーロー天狐仮面、他称いやに陽気な性犯罪者ゼンラマンです。管理局も性犯罪者に仕事を取られているので情けなくて世間に公表できませんが...」

なのははそこでさっきの男が性犯罪者であることを思い出し、さっきの男が裁人であるかどうか少し悩んだりした。だがある一点を思いたし、やはりさっきの男は裁人であると確信した。

「なんか毎回ここに次元犯罪者持ってきていて、いつの間にか局では私が担当になっていたり。更に最近では家にいる友達を呼ぶかのような感覚で私を呼んでくるんです...」

紹介がだんだん愚痴になっていった辺りでなのはは彼女の話を聞き流し、男が裁人であると確信したある一点について思いを馳せていた。

(やっぱり変わってなかったんだ)

「いいお尻だったなあ・・・」  
「えっ」

## オレ、戦闘

「やあ、別次元で全裸になったりした裁人君だよ。  
ん？オレは何を言ってるんだ？」

「まあ、それはそれとして。」

「突然だが目の前にでっかいワンコロが居たらどうする？」

「オオカミのようにデカイワンコロだ。」

「撫でくりまわす？犬好きにとってはデカイワンコと戯れるのは一  
種の夢でもあるだろう。」

「すぐさま逃げる？犬嫌いにとっては悪夢のような光景だろう。」

「無視する？これが一般的かな。写真だけ撮って雑誌に投稿するも  
よし、SNSに挙げるもよし。」

「保健所に電話する？まあ、迷惑だよな、そんなのが近所に居たら。  
まあ、とれる行動としてはそんな感じだろう。」

「オレか？オレは……」

目の前にはデカイ牙がある。犬特有の発達した犬歯だ。

「鼻はちょうど額の直ぐ前にあり、興奮した鼻息で汗に濡れた髪の毛  
が後ろに撫でつけられる。」

「鋭い眼光はギョロツとオレを睨みつけている。」

「両手で木刀の切っ先と柄をそれぞれ握り、犬ツコロの口の奥に入れ  
込んだ木刀の腹の部分は現在犬の牙が食い込み、穴が穿たれている。」

「両腕がプルプル震える。」

「一瞬でも気を抜いたら最後、振りほどかれて木刀もオレの命も散る  
だろう。いや、実際には散らないが、モグモグされるのは流石にトラ  
ウマになるだろう。」

「こんな感じである。」

「頼む、なのは……来てくれ……！」

☆

ゴンツ!

頭に鈍い衝撃が走る。ジジイの木刀が頭に叩き込まれた。

疲れ果てて半ば朦朧としていた意識ではジジイの木刀の動きを目で追うことすらできなかった。

体が徐々に傾いていき、道場の床にバタンと倒れこんでしまう。

「お前、体力無すぎだ。いや、違エな...。ペース配分が下手すぎだ」

「普通に、動いて、る、だけ、だよ...!」

「いや、下手だね。お前は変なところでも力を入れちまって結果台無しになつてんだよ」

「ああ? 強く、動かなきゃ、意味、無いだろ?」

「違エよ、要は緩急が大切なんだよ。抜くところは抜く、入れるところは入る。こつちのがいいもんなんだよ」

「緩急、ねえ...」

言われてもいまいちピンとこない。

するとオレのその様子を悟ったのか、ジジイは少しイタズラっぽくニヤついて

「つーわけだ、表でろ、ガキ」

少し休憩してから言われるままに外に出ると、有無を言わずに近所の山に連れてこられた。

山、と言っても上に神社がある低い山だ。神社までの道には石の階段があり、そこを登って神社の境内まで行く。

近所のジーサンバーサンなら神社に用があると少し無理をしてでもこの神社に行く。まあ、付き合があるからな。

しかし、若者は年末とかにこんな石段を登りたくはないのだろう。少し離れた、山の上にはない神社に行く。そんな少し寂れた場所だ。

さて、オレはその山に来た時点である程度の内容は理解していた。どうせ石段ダッシュだろう。まあ、体力をつけるんだったら一番の方法だろう。

少し疲れるぐらひは覚悟して石段に足をかけた瞬間ジジイが「おいガキ、そこから登るんじゃねエよ」

イタズラが成功した子供のよ様な顔で止めてきた。

「はあ？じゃあ、どこから登れっていうんだよ？」

「あそこだ」

ジジイが指を指した先は獣道すらないよ様な神社の鎮守の森、その端っこだ。

「…へ？」

「あ、木刀持って構えながら行けよ。足下の訓練でもあるんだからなア」

ジジイは本気で言ってる。2年間ほぼ毎日道場に通いつめてるオレが言うんだ。間違いない。

「…マジ？」

一応聞く、嘘だと信じたい。嘘だと言ってよバーニイ。実際はジージイだが。プツ。

「マジだ」

有無を言わさぬ眼光であった。

オレは泣く泣く階段ダツシユならぬ森ダツシユを始めた。

☆

「ハア…ハア…！」

現在森ダツシユ5往復目。そろそろ折り返し地点の神社に着く。

ジジイの言った通り、確かにこれは力を抜く場所、入れる場所を意識しないとかなりキツイ。いや、意識しててもキツイ。

木刀を構えながら走ってるので足場と足の使い方を考えなければすぐに転けてしまう。

転けたのはジジイに分かるらしく、下に降りたときに転けた回数指を折って数えてたのは流石にゾツとした。

何も無いよな…？

そうこう考えてるうちにそろそろ頂上だ。降りには体力的に楽だが、

足下に注意を払わないと直ぐに転けてしまう。謎のカウントが増えるのはもう嫌なので気をつけていこう。

お、森を抜けるぞ…

森を抜けると、そこは犬だった。

…うん？

何かでつけえ犬ツコロが目の前に鎮座している。もう視界を埋める勢いでデカイ。

こんなのが居たら近所で噂になってるはずだが、オレはこんな聞いたことないぞ。

つまり、いきなりデカイ犬ツコロがこの街に現れた。しかもごく最近。

厄ネタの臭いしかしねえ…

てか、もしかしなくてもジュエルシード関連だよなあ…

うーん、なのはを呼んだ方がいいよな？オレじゃジュエルシードの封印が出来ないからな。

犬ツコロはまだこっちに気づいてないし、ここはなのはに救援を求めた方がいいな。

うし、降り終わったら即行でなのはを呼びに行くぞー。

ジジイから逃げてるわけじゃないぞー。

さて、自己弁護終わり。さっさと降るか。

パキッ

あつ、やべつ…木の枝踏んじやった…。

グルルルル

後ろから唸り声が聞こえる。

飢えた者の声だ。

お前を喰わせろと囁いているのが分かる。

そーつと後ろを振り向くとそこには眼をギラギラと光らせ、口元からは涎をだらだらと垂らしてこっちを見る巨大な犬ツコロがいた。

額から嫌な汗が流れ落ちる。

思わず足がすくみそうになる。

この犬ツコロから向けられているのは本物の、純粋な殺気だ。

そこからの展開は早かった。

まず犬ツコロがこちら目掛けて噛みつく攻撃。

「うおつと!?!」

オレはそれを右に転がって避けつつ間合いを離そうとする。

が、犬の狩猟能力はオレの想像していたよりも高く、避けて体勢をたて直そうとした瞬間に二撃目の噛みつきがこちらを襲う。

「またかよ!?!」

オレは咄嗟に木刀の持ち方を変え、右手で柄を、左手にで切っ先を掴み、木刀の腹を犬ツコロの口の奥に入れ込み食い込ませる。

ミシイ

犬ツコロの牙が木刀に食い込む。

犬ツコロの牙はギリギリオレには届かず、お互いに顔を見合わせた均衡状態となっている。

犬ツコロは頭を左右に振り、木刀とオレを引き剥がそうとしているが、オレも力を込めて耐えているし、この木刀はジジイの特注品で櫛の木で作られた木刀だ。固さと頑丈さは一級品なのでなかなか引き剥がせない。

「こんなので毎日叩かれていたのか!?!」

それはともかく、正直、この均衡状態を崩さなければ負けるのは体力と力の差で俺だ。

何か勝つ方法は無いか。そう思ったオレは今日ジジイから習ったことに行き着いた。

「力の、配分を!?!」

そうやって力を緩める。

力を緩めたのを感じ取ったのか、犬ツコロは今までよりも力強く首を振り、オレを食い込んでた木刀ごと引き剥がして上に飛ばした。

子供程度の重さはこのデカイ犬ツコロにとっては屁でもなく、犬ツコロはオレを難なく空に放り出す。

浮遊感を感じる。下には犬ツコロが大口を開けてオレが下に落ち

るのを待っている。

それでいい。喰らわせてやるよ。

「セイヤアアアア!!」

オレは空中で体勢を整え、犬ツコロの鼻目掛けて木刀を思いっきり叩きつける。

ギャンツ!

犬ツコロが悲鳴をあげてもんどりを打つ。

鼻というのはかなり敏感な器官だ。いくら空中での体重が乗らない一撃とはいえ、鼻への打撃ならかなりのダメージを与えられる。

「これで、終わりだ!」

オレは木刀を構え直し、地面に転がる犬ツコロへ必殺の袈裟斬りを放つ。

「チエストオオオオオツ!!」

ボゴオツ!

袈裟斬りは犬ツコロの頭へ見事に当たり、犬ツコロは悲鳴をあげる間もなく静かになった。

「ハア、ハア、やった、勝ったぞ...!」

オレは気力も使い果たし、立つこともままならず、その場に崩れ落ちる。

体力的な疲れではなく、精神的な疲れだ。

始めて、純粹な、野生の殺気を受けた。

殺気とはあそこまで恐ろしいものなのか...。

「ここだよ!なのは!」

「うん!って、き、サイ君?!」

なのはとユーノがやって来た。

「なのは、早く、封印してくれ...!」

「そ、そうだ!なのは、早く封印を!」

「分かった!」

そしてなのはは変身してジュエルシードの封印を始める。

「裁人、もしかして一人で倒したの?」

「おうよ、結構、きつかったけどな」



「魔法も使えず、しかもこの辺りの被害を見ても爆破の痕跡も見当たらない。その手に持つてる木刀だけで倒したの？」

「つたりめーよ。伊達にタイ捨やってないって言っただろ？」

「すごい……」

「ふふん、サイ君は凄いんだよ」

なのはが青い宝石とあの犬ツッコロから凶暴性を抜き取ったみたいな子犬を手に持ってこっちへ来た。

「お前が威張ってどうすんだよ。てか、その子犬は？」

「ジュエルシードを封印したら出てきたよ」

「今回はどうやら生物がたまたま拾って願いを叶えたパターンだね。願いはく強くなりたいかな？」

てことはアレはこの子犬だったってことか。そんなパターンもあるのかよ。

「っ！サイ君、後ろ！」

って、ヤベっ！ジジイの気配っ！

オレは急いで立ち上がり後ろを振り向き、襲ってきた木刀を防ぐ。

「おう、サボって女の子とお喋りたアいいご身分だなア、ガキ」

いつまでも山を降りてこないで痺れを切らしてこっちに来たの  
だろう。

「いきなりたあ卑怯じゃねえの、ジジイ」

犬ツッコロに穴を開けられた木刀がミシミシと音を立てる。

このままでは木刀が折れてしまう。

そこでオレは木刀を少し斜めにしてジジイの木刀を滑らせ、そのまま自由になった木刀をジジイの腹に叩き込もうとする

「ほう、分かったじゃねーか」

ジジイが感嘆の声を漏らす。

力を抜き、チャンスを作る。受けるのではなく、受け流す。守から流れるように攻に転じる。

待つことを捨てる、『タイ捨<sup>待</sup>』であれ。

「が、まだまだだな」

ジジイの鋭い蹴りがオレの木刀よりも速く、オレの腹部に刺さる。

「ゴフツ…」

オレは吹き飛び、木にぶつかって気絶した。

☆

ユーノは目を見開いて驚いていた。

「い、今のは…!?!」

「そうだね、ユーノ君は知らなかったね。あの人がサイ君の剣術の師匠だよ」

「あの人が…」

「と言つても、私も稽古を見るのは始めてだよ」

なのはも内心驚いていた。裁人はあんなことを何時もやっているのか。それを何故黙っていたのか。

そんな自分の知らない裁人がいたことにショックを受ける。

そして、自分の知らない裁人を知っている老人に、少しだけ嫉妬した。

「おう、士郎のこの嬢ちゃん。あのガキと友達なのか?」

老人がこちらへと近づいてきた。

「はい!・ワルイ子友達です!」

なのはは元気よく答える。

老人は少しの間面食らった顔をしたが、直ぐにニヤリと笑って

「そうか、あのガキのことをよろしく頼む」

そう言つて去つて行つた。

「カッコいいなあ… あの人も、裁人も…」

ユーノは誰にも聞こえないように呟いた。

学者肌の彼でも、立派な男の子である。そういうものに憧れる。

「そうだ!・サイ君を起こさない」と

そう言うとなのはは小走りで気絶している裁人に近づく。

「むにゃ… ジジイ、覚悟しろ…」

裁人は寝ていても稽古をしているようだ。

(もう、サイ君のバカ…)  
なのははいつもよりも強めに裁人の尻をつねった。

## オレ、VS木

やあ、裁人くんだよ

オレは今地元サッカーチームのユニフォームを着て試合前のブリーフィングに参加している。

もともとはなのはに土郎さんが監督をしているサッカーチームの試合の観戦の誘いがあったのが始まりだ。

しかし、当日にチームメンバーの一人が風邪を引いてしまい、さらに代役がいなかったため、急遽オレに白羽の矢がたった。

同じ学校の人もいたのでそれほどアウェイな空気にならなかったのが幸いだ。

今日のこの試合にはなのはもちろん、アリサ、すずかの2人もなのはに誘われて観戦に来てる。

これはここ最近雑に扱われてる気がするオレの発言権復活のチャンス！

ふははははは！全力で相手をしてやろう！

「何でアイツ急に笑ってんのよ……」

「面白いことでもあったのかな……？」

「あ、あれサイ君が調子にのって何かやっちゃう顔だ」

何か聴こえるけど無視だ無視。

「よし、裁人君、急で悪いけど先発で出てもらうよ」

「うっす」

ふっ、土郎さんはオレを温存しないつもりらしい。

見せてやる、稀代の名プレイヤーの実力を！

☆

結論から言おう。

摘まみ出された。

まず開始3分、いきなりゴールを決めた。

これだけなら問題なかったが、どうも決め方がファンタジー過ぎた

らしい。もはや少林サッカーかイナズマイレブンの領域だった。

お互いのチームと観客は盛り上がったがその時点でお互いのコート陣に微妙な空気が流れ始めた。

相手チームからは驚きと困惑、自分チームからはそれらに加えて申し訳ないという雰囲気ベンチの方から伝わってきた。

次に開始から10分、相手ゴール間近のスローインでこの前テレビで見たハンドスプリングスローイン、ボールを投げる際にハンドスプリングをしてから投げる完全な魅せ技をすることにした。

ボールがゴールに吸い込まれていった。

決まった瞬間はフィールドが大いに沸いたが。少し熱気が収まって冷静になると

『あれ？アイツヤバイんじゃない？』

そういう雰囲気漂ってきた。

実際、オレ自身もこちら辺で自分がやり過ぎたことに気づいた。

そうだった、ジジイとか土郎さん、お兄さんとばかり運動してたから感覚が麻痺していた。オレ、身体能力が滅茶苦茶高かったんだ。

そして、当然土郎さんに呼び出され告げられた言葉は

「交代だよ、よく頑張ったね」

オブラートに包んでいるが戦力外(?) 通告である。

「うっす」

稀代の名プレーヤーのサッカー人生は10分で終わりを告げた。

「なんていうか… お気の毒だね、裁人君…」

「くそう、オレに着いてこれない世界が悪い…」

コートよりちよつと離れた場所で体育座りしてぼーつと試合を眺めながら呟く。

「あ、すずか、同情の必要無いわよ、こいつ反省してないわ」

「ね、言ったでしょ？サイ君が何かやらかすつて」

「ばつきやろー！ちよつとオチャメをしちやっただけだろ！」

「ちよつとのオチャメであんなに場が凍りついたのは始めてみたわよ！」

「ぐっ… お、オレは悪くねええええ!!」

言い返せなくなつてオレは走つて逃げ出した。

「あ、サイクーん！試合の後はお食事会があるよー！」  
走つて戻つた。

☆

さて、お食事会でご飯を腹一杯平らげたオレだが、1つ気掛かりなことがあつた。

お食事会の途中でなのはが何か思い詰めたような顔をしたのだ。帰りにその理由を尋ねてみると

「多分、今日のキーパーの子ジュエルシードを持ってるよ。」

「ジュエルシード!?!おいしい、人の手に渡ると取りづらいぞ。」

しかもあのキーパー、ウチの学校の生徒じゃない。接点が無い分譲つてもくれないだろう。

「うん、見間違いかもしれないんだけどね。」

「ジュエルシードが暴走すれば、確実に人が巻き込まれるだろ」

「うん、そうだね。前は人が少ない所で、かつ無差別な破壊をするタイプではなかつたからまだ良かった。でも、人を基に暴走してしまうと絶対に周囲への被害が出てしまう」

ユーノも危機であると言っている。それこそ、商店街の真ん中で暴走した日には大変なことになるだろう。

「明日からジュエルシード探しにかなりの時間を割くようにしなきゃだね。下校の時は遠回りして海鳴小学校の近くを通るようにしようよ。もしかしたら見つかるかもしれないからね」

海鳴小学校とはこちら辺の子供が通う公立の小学校である。さっきのキーパーの子はおそらくこの生徒だろう。

「ああ、早くジュエルシードを回収しないと。」

☆

サッカーの試合から数日後、オレは商店街に買い物に向かつてい

た。

まあ、いわゆるおつかいだ。

別に誰にも内緒でお出かけしたわけじゃない。これが初めてではない。

おつかいに行くといつも肉屋のおじさんがくれるコロツケを楽しみにしながらウキウキ気分で商店街すぐ前の信号が赤だったので停まると、向こう側にどこかで見た少年を目にした。少女と手を繋いでいる。友達かカップルだろうか？

誰だったかな、あいつ？ちよつと前に見たような…

その少年は手を繋いでいた少女に顔を向け、赤らめた顔で決意を固めた目をした。

告白か…しかし、この商店街前で告白とか思い切るなあ…

そして、その少年は青い宝石のようなものを相手の少女に差し出す。

それを目にした瞬間、俺は走り出した。

少年が口を開く。

信号が青に変わる。

少女が顔を赤らめ、頷いた。

その瞬間、地響きと共に二人の足元から巨大な木が生えてきた。

それは二人を取り込みながらメキメキと生長していき、最後には周囲のどの建物よりも高くなってしまった。

人々は逃げる。幸いそれほど人はいなかったため、取り返しのないパニックにはなっていない。

「チツ…間に合わなかったか…」

その木は意思を持つかのように枝を動かして周囲の物を破壊していく。

今は木刀も持っていない。なんとかこれの気を引いてなのはが来るまで持ちこたえなければ。

そう決意して木の幹へ向かおうとしたその時、子供の泣き声が聞こえた。

「うえええん…痛いよお…ママア…！」

どうやら木から逃げようとした際に転けてしまったようだ。膝小僧が擦りむけてそこから血が流れている。

恐怖と傷みで逃げる事が出来ない少年に木の枝が伸びていく。

「させるかっー!」

少年を助けようと走り出すのが、このままじゃ間に合わない。木の枝がその速度を上げてどんどん少年へと近づいていく。

このままではあの少年は…

やめろ、やめろ! やめろ!!

「やめろオオオオオオオオ!!」

B O M B ! ! !

背中を爆発させて、なんとかバランスをとりながらその推進力を利用して少年の元へ向かう。

「おおオオオオオオオオツ!!」

感じたことのない速度だ。背中が痛い。いや、んなことはどうでもいい。間に合え、間に合え!

手が届くまで5メートル、2メートル。その間も枝の速度は速くなっていく。

1メートル。もう枝は少年の目の前だ。

50センチ。枝に気づいた少年の泣き顔が驚きと恐怖に変わる。

30、20、10、5、4…

そして、オレの手は木の枝が少年を貫くより早くそれを掴んだ。

「消えろっ!!」

ボボボボボボツ!!!

木の枝に魔力を流してから手を爆発させる。すると小さな爆発が連鎖的に起き、枝の根本まで吹き飛ばした。

少年の方へと振り向く。

少年はポカンと口をあけてこちらを見ていた。涙は止まっている。

オレは靴と靴下を脱いで少年にニカツと笑いかけると、足を爆発させて木の前に飛ぶ。

「ありがとう!正義のお兄ちゃん!」

少年が満面の笑みでお礼を言って走っていった。



正義のお兄ちゃん、か… 悪くないな。

「ん？アレは…」

視界にピンク色の光が映る。なのはの魔力光だ。

「しっかし遠いな、あのビルから当てられるのかよ？」

光の位置から考えるになのはは遠くの建物の上に立っているようだ。魔力に減衰とかは無いのか？

木なのはの魔力を感知したのか自らの中でも大きく太い枝を数本なのはに向かわせる。

その速度はかなり速い。

「げっ!!各個撃破で落とす!」

なのはに向かったのが速い順にその根本に向かい、爆破する。

空中という足場が無い場所での爆破だったので爆発の衝撃で飛ばされる身体を爆発で軌道修正して空中に留まるという無茶苦茶な方法をとったせいでもかなりのダメージを負ったが、なんとか枝を全て吹き飛ばすことに成功した。

「はあ、はあ、なのは!まだか!」

聞こえる筈は無いが叫び声を上げてなのはの方へ振り返る。

「ん?」

ピンク色の光が先程よりも大きくなっている。

あれ?てか、もう撃つてね?

近づいてくる。

このままだと、オレに当たるんじゃないや…

そして視界が1面ピンク色の光で埋め尽くされた。

「ギャアー!!ちよっ、ま…」

ズドン!

☆

ガブっ

「いひゃあ!」

裁人は臀部への激痛で跳び上がるように目を覚ました。

「何すんだよ!？」

抗議の為に振り返るとそこには赤く大きな狼と黒いマントを羽織った金髪の少女がいた。

少女の歳はなのはや裁人と同じくらいだろうか。かわいらしい顔立ちであるが、その顔はキリリと引き締められ、目には切羽詰まったような真剣さが感じられる。

「その右手に持つてる青い宝石を渡してください」

「右手？」

裁人が自身の右手を見ると確かにそこにジュエルシードが握られていた。

「おわっ?!?いつの間に握ってたんだ？」

「それを渡してください。」

（おかしい、これはユーノが発見したものの筈だろ？なんでこの子が欲しがっているんだ？）

裁人は少女がジュエルシードを欲しがっていることを怪しいと思いい、ますます少女には渡せなくなつた。

「ダメだ！これはオレの友達のもんだ、お前には渡せない！」

「そうですか…。」

少女は非常に残念そうな顔をしながら、裁人に手を伸ばす。

「set up」

一瞬目映い光が放たれ、こちらに伸ばされていた少女の手に金色に輝く光の刃をもつ大鎌が握られていた。必然、少女が大鎌を裁人に向けていることになる。

「な、なにを…。」

「最後です。その宝石を渡してください。」

辺りはまだ昼。普段この頃に人で賑わう商店街前には誰もいない。

少女と狼、そして裁人以外には。

真上に登った太陽が、雲に隠れた。